
カナナ

Gardenia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンナ

【Nコード】

N7496W

【作者名】

Gardenia

【あらすじ】

中学時代の同級生、カンナが突然田舎に帰ってきた。

仕事の依頼で連絡をもらった琢磨^{たくま}は、元クラスメイトの縁で会ううちにいつしかカンナに惹かれていきます。

再会したカンナ自身がミステリアスなのか、それとも好きな女だから掴みどころがないのか。

琢磨には判断できないままカンナに惹かれていきます。

一方カンナは、離婚して実家に帰ってきたものの元夫からの嫌がら

せが始まります。それに屈することなく力強く生きていこうとする
カンナ。

子供の頃、人生を自分で決められる大人になりたいと思っていたこ
とを思い出し、今度こそはしっかり自分の足で歩いてみようと思心
します。

もちろん男にも振り回されることのない人生を！

けれど琢磨に再会してから、何故か琢磨のことを考えてしまいます。

模索しながら新しい形の恋を見つけようとする二人。

どういう結果になるのでしょうか！

1 - 1 (前書き)

+++++

登場人物：

小野寺 カンナ（おのでら かな） 47歳

バツ1

琢磨と正吾の同級生。中学一年のときに引越してきた。

高校卒業後神戸に引っ越したが、その後海外に行っていると噂があった。

離婚して実家に戻ってきた。

秋吉 琢磨^{あきよし たくま} 47歳

カンナとは中学の同級生。

既婚

勉強キライで、落ちこぼれたちと遊んでいたら暴走族になっていった。

その暴走族にもあまり身が入らず、親の言うとおり三流大学を卒業し、親の興した土木建築会社を継いでいる。

現在はあくれ従業員の頭として正社員20人ほどの会社の社長。

秋吉 満^{あきよし みつる} 49歳

既婚

建築士。一級建築士として親の土建会社は継がずに近所で独立。スタッフ5人の会社の社長。

琢磨と共同で仕事することも多い。

田所 弘明^{たどころ ひろあき} 40歳

独身

カンナの顧問弁護士
代々弁護士一家の御曹司。

本人は争いが嫌いで、主に財産管理の分野で活躍している。

山野 やまの 正吾 しょうご 47歳

既婚

琢磨やカンナの同級生。

中学のとき、カンナの友達と付き合っていたためカンナともよく遊んでいた。

喫茶店経営者

秋吉 あきよし 陽菜 はるな 15歳

琢磨の次女 高校一年生

カンナを崇拜している

場所設定：関西圏の人口約6万人ほどの地方都市

大阪、神戸などには車で2時間ほどかかる

+++++

まだ時折肌寒いものの、もうテレビでは桜前線の情報が聞こえてくる。

現在はすでに47歳になりめつきり体力の衰えを感じる琢磨。

子供の頃はガキ大将で中学時代は不良少年。なんとか大学だけは卒業し、田舎に帰って親の家業を継いでいる。

自分で建てた家もある。妻や子供にも不自由はさせていない。荒くれだが気心の知れた従業員も居る。頭の痛いことがあるとすれば最近別れたはずの女が電話をかけてくるか、不景気を理由に支払いを渋るクライアントが時々居るくらいだ。

今朝の琢磨は機嫌が悪かった。

というのも、嫁が新しい服を買うということで朝食中ずつとうるさかったのだ。

好きなものを買えと言ってはいるが迷うのが女の楽しみということ、季節ごとに毎回同じような話を聞いている。

朝食が終わる頃ようやく、今度東京に行く長女と一緒に上京して住まいの準備と買い物をするればいいと言うことで一件落ち着いた。

嫁にした女は小柄でくるくるとした目がかわいい女の子だったと思いが、い出すと微笑まずにいられないが、

今は3人の子供を産み育て、しっかりと肝っ玉母さんだ。体系も少しぽっちゃりしてきた。

長女はこの春から東京の大学に行く。

長男は大学受験に突入するし、次女は今年入る高校に困るくらいにデキが悪い。

実際に、ツテを探して頼むこみようやく高校に入れたのだ。

逃げるように事務所に来てお茶を飲んでみると、「社長、山野コーヒーの店長さんがお見えです」と事務員が内線で知らせてきた。

中学でクラスメイトだった山野正吾は、一度もこの街を出ることなく地元で喫茶店を始めた。自家焙煎という触れ込みのコーヒー豆が美味しいからと事務員が定期的に注文しているようである。

取り立てて仲がよかったこともなかったが、クラスメイトのよしみだと正吾がいつも言うので、従業員達は社長の友達の店としてよく利用しているようだった。

電話で注文すると正吾は手の空いた時間にコーヒー豆を届けにくる。いつもは事務員に渡して琢磨には会わずに帰るのだが、めずらしくこともあるものだ。

「通してくれ」と琢磨が言うと、「どうも、どうも！」と相変わらずの惚けた口調で正吾がドアを開けた。

「いつもご注文ありがとうございます」と言うので、「いやいや、いつも届けてもらって悪いな」と一応社交辞令を言う。

「今日は何か？」と促すと、「え〜っと、同じクラスだったカンナって覚えてるだろう？」と言った。

「結構お前とは喋ってたような気がするけど？」と言う。

カンナといえばあのカンナしかいないだろうかと、目を細めながらおぼろげな記憶をたどってみる。

「小野寺カンナだよ」と正吾が言った。

「ああ、小野寺な。20年以上も前のことだぞ、ちょっと待て。顔ははつきり思い出せない」

「そうか？ 結構印象の強い子だったけどなあ」

「お前達はよく一緒に遊んでたんじゃないか？」

「ああ、カンナと麻里子が仲良かったからなあ」と言う。

正吾はその当時同じクラスの麻里子と付き合っていたのだ。

「なんとなく思い出したわ。はっきりとじゃないけど」と正吾が言うと、

「昨日ふらりと店にやってきて、お前のこと聞いてきた」

「ふ〜ん」

「何でも仕事の相談をしたいらしい」

「へ？仕事かあ？引っ越してきたんかな」

「あいつさ、長いことここ離れてたから、お前がカンナのこと覚えてるかどうかわからんと心配してた。一応俺から話してみてくれって言うんだわ」

「直接電話くれればいいのに」

「うん。それでも最初は電話かけ難いんだと」

「そうなんか」

「話聞いてくれるようだったら、2〜3日のうちに電話するってさ」「わかった」

「あのさ、カンナ、離婚して帰ってきたらしい」

「へえ。まあ今時珍しいことでもないさ」

「ああ、そうだな」

「オバサンになつてたか？」

「ん〜、ま、会えばわかるわ」と正吾はニヤリと笑って帰って行った。

1 - 1 (後書き)

主人公達の年齢が高いのですが、琢磨に大学生になる子供が居ることを想定したため47歳になってしまいました。

結局、小野寺カンナから琢磨の事務所に直接電話が入ったのは3日後だった。

ちょうど銀行から帰ってきて、お茶を飲んでいる時だった。

「社長、小野寺さんという方からお電話です」と事務員が取次いで、「はい、お電話変わりました」と言つと、

「秋吉様でいらっしゃいますか？」

わたくし、小野寺カンナと申しまして、中学の同級生だった者です。数日前に山野正吾さんに連絡をとりまして、この電話番号を教えてくださいいただきました。

覚えていただいていると有難いのですが・・・」とゆっくりと聞き取り安いスピードで低めの声が流れてきた。

綺麗な標準語だ。

琢磨は気後れしながらも、「おおっ！小野寺か。3日前に正吾が言いに来たよ」とわざとくだけた言い方で返した。

カンナは「思い出していただけました？」と丁寧に聞いて来た。

「気取って電話してくるから、百科事典のセールスレディかと思つたよ」と言つて笑つと、電話の向こうでもフフンと笑つたようだった。

確かに正吾が来た時は、最初は顔を思い出すのに時間がかかったが、

一度思い出してみるとはつきりと鮮明な記憶が甦っていた。カンナとは学校で、クラスに居る時だけはよく話していた。出席番号も近かったので、席も近くになることが多い。しかし、教室の外に出ると一度も口をきいたことはなかった。放課後や休日には街で見かけることがあっても、琢磨は絶対に声をかけなかったし、カンナは気づきもしなかった。

彼女には特別に親しい友人が2、3人居るようだったが、それ以外の人は、秀才と呼ばれている奴や反対に不良と呼ばれている奴でも適度な距離を保って気さくに話せる不思議な女の子だった。しかし、大人しめの普通のクラスメイトとはあまり話してなかったように思う。

その他大勢のようなグループは彼女の目には映っていない、そんな感じだったと覚えている。

美人ではなかったが愛嬌があり、笑う時は天真爛漫に笑い、ちょっと天然で、男子の間では結構人気があった。

でも、確か誰とも付き合ってた。

人気があったのに誘い難かったのは、ひとえにカンナが突出して成績がよかったからだろう。学年でいつも3番以内に入っていた。

もちろんクラスでは1番トップの成績だ。

琢磨は落ちこぼれで、しかも暴走族紛いの不良仲間に入っていたので、声をかけられないクラスメイトの気持ちがよくわかる。

誰が好き好んで自分より頭の良い女に誘いをかけられるというのか。

「で？」と琢磨が聞くと、

「実は、家を建てようと思っていて、業者のこととか相談に乗って

もらえればなと思うの」とカンナは話を切り出した。

「おたくの会社は長年信用と実績があるし、基礎のほうは是非お願いしたいと思ってますが、

設計と建物の施工に関しては、長くこの土地を離れていて知り合いが少ないので、

良いところの情報か、紹介して頂けたらと思っっているんです。

一度お時間を作っていたただけなんでしょうか？」

「なるほど」

「お話だけになるかもしれませんが、電話よりもお目にかかって説明できないかなと思っっています」

少し時間をかけて、琢磨は仕事用の会話に切り替えた。

「わかりました。とりあえずお話を伺いましょう」

「よかった。私としては今日から3日間の間でお時間いただけると助かります」

「急ぐ話なんですか？」

「取り立てて急いではないのですが、私の中ではかなり時間をかけて考えてることなので、

これから実行に移していきたく思っているんです。

それに来週はちょっと街を離れるかもしれないので……」

琢磨はカンナの考えを早く聞いてみたい気になってきた。

「そうですね、ちょうど今日の午後は時間がとれます。

次は、明々後日の午後ですね」と言つと、

「午前中にはお時間ないですか？」と聞かれた。

「今週は、午前中は現場に行くことが多いので……」と琢磨が言うつと、

「では、差し支えなかったら本日午後に伺います。急で申し訳ないですね」とカンナが詫びた。

「以前、お父様の会社があったところでよろしいのかしら？」とカ
ンナが聞いたので、

「ああ。でも、今はその向いに四角い2階建ての建物になってるか
ら。」

看板があるからわかるとおもっ。事務所は2階になってるからそこ
に来てくれ」と琢磨は答えた。

「それから、丁寧な言葉はやめてくれ」と言うと、カンナは笑いな
がら「わかりました」と答えた。

午後2時の約束にして電話を切ると、ちょうど正午になった。

約束の午後2時。その数分前に窓の外で車の停まる音が聞こえた。

窓から覗いてみると、白い国産車のワゴンがとまったところだった。
小柄な女性が後部座席から紙袋を2つ取り出し、建物の入り口を探
している。

小さく頷くとその女性はゆっくりと入り口に向かって歩き出した。

顔ははっきり見えなかったが髪は短いほうだった。毛先が跳ねるよ
うに揃っていない。

琢磨は大人しく社長の椅子に座って待つことにした。

1 - 2 (後書き)

次の更新は、10月4日 午前7時を予定しています。

事務所の入り口がざわついたかと思ったら、ドアがロックされた。「はい、どうぞ」と声をかけると、ドアが静かに開けられて、スレンダーな女が顔を覗かせた。

入っては来ずにドアのところに入ったまま、「秋吉社長さん？」と聞いた。

低めにゆっくりな電話で聞いた声だ。

「小野寺か？」

「はい。事務員さんに友達だからって案内を断ってしまいました」と笑った。

「びっくりしたよ。まあ、入ってくれ」と言っただけで立ち上がり、ソファを勧めた。

カンナは、「差し支えなかったらこっちのほうが・・・」と言ってミーティングテーブルを指差した。

「ああ、どこでもお好きなほうに」と笑って琢磨もミーティングテーブルに近づいた。

カンナが座ってから琢磨も椅子を引いて座る。

「オバサンになったでしょ？」

「いやいや、変わってないのでビックリしたんだ」

「そんなことないわよ。やっぱりお肌は歳相応だわ」と言って、自分の頬に手を当てたカンナはどう見ても40歳を過ぎているようには見えなかった。

「俺もオジサンだよ」と琢磨が言うと、カンナは琢磨をじっと観察してから「良い感じじゃないの」と言った。

何故か琢磨はほっとした。

「もっとオジサン臭い人も居るもの」

「まあ、仕方ないな。オジサンなんだから」

「オジサンとオバサンで仲良くしてね！」

「ああ。何年くらいになるんだ？」

「中学一年と三年のとき同じクラスだったから、、かれこれ、何年かしら？」

「22年か、そのくらいだなあ」

「じゃ、私は12年前くらいかな」と言って済ました顔をしている。

「おいおい、同級生なのにそれはないだろう」と呆れて笑ってしまった。

二人で笑っているところに、事務員がお茶を運んできた。

「先ほど、こちらのお客さんからお菓子をいただきました」と事務員が琢磨に報告した。

「氣い遣わなくていいのに」と琢磨が言うと、

「ちょうど東京から取り寄せたのがあったのよ。お口に合えば良いんだけど？」とカンナは事務員にニッコリ微笑んで声を掛ける。

「どうせ男性は甘いものをあまり食べないだろうから、貴女専用にも思ったんだけど・・・」とカンナが言うと、事務員は嬉しそうに「ありがとうございます」と言っぺコリとお辞儀をして部屋を出て行った。

「悪いな」

「いえいえ、今日も電話で気持ちよく取り次いでもらったし、これからも度々電話するかもしれないから」

よく見るとカンナには子供の頃の面影が残っていた。

年齢を言わなければ30歳後半くらい、よく見たところで40歳は超えてないと思わせる。

その若さが昔に近いような印象を受けたが、雰囲気は全然違った。街で遠目に見かけたら、いや、つい先ほど部屋の入り口に立ったと

きでさえ、来ることを知らなければ初対面の女性だと思っただろう。

「ついでにこれを先に渡しておきます」と言って、カンナは紙袋を差し出した。

「何？これ」

「お酒は飲むんでしょ？」

「ああ、飲むけど・・・」

「珍しい焼酎つてのがあったから持ってきたのよ」

「いいよ、そんなの」

「まあ、そんなこと言わずに。私は焼酎を飲まないから、貰ってよ」

袋の中を見ると、カンナが言うようにほんとうに珍しい焼酎だった。

「これ、どうしたの？」と琢磨が聞くと、「友達が手に入るっていうので1本だけ買っておいたものなの」

「すごいな、これ」

「焼酎飲めるのだったら、遠慮なく納めてよ」と言う。

「でも、貰えないよ、こんなの」

「一口飲んでくれれば良いから。そうしたらこっちの思う壺なので」と言ってカンナはニヤニヤ笑っている。

「えっ？」

「あのね、こういうのでも貰ってくれないと頼み難いのよ」

「ほお？」

「そのうち、その焼酎だけじゃ割りにあわないって思うかもしれないんだし」

「ややこしいことなのか？」

「ん〜、全然ややこしくはないんだけど、今回の件は私がかかなり我俣言いたいので。」

先に賄賂を渡しておきたいのよ」と言ってカンナは苦笑した。

「そうなんだ」

「うん。そうなのよ。」

こっちに家を建てるのを迷ってんだけど、時間もあるし、やってみようかなと思って。

でね、なんかもうあまり妥協したくないなあって思ってた」

「ふむ」

「電話でも言ったように、こちらにはあまり知り合いが居ないというのと、

私が建築に関して素人だということ。

なのに思い通りのものを作りたいと思っている。

私と現場の間にプロが入る必要があると思うんだ」

「なるほど。充分にややこしそうだな」

「でしょ？だから、それは話を聞いてくれるだけでも貰っていただきたいの」

カンナは琢磨の顔をじっと見て返事を待った。

「わかったよ」と、ようやく琢磨が承知した。

お茶を一口飲んで、その湯飲みを横に置き、カンナは「じゃ、簡単に説明して良いかしら？」と言いながら鞆のなかから紙を取り出した。

琢磨も椅子に座りなおした。

まず、カンナは図面を一枚琢磨に渡した。

「これは土地の・・・見取り図ってどういうの？よくわからないけど。そこに住所が書いてあるわ。広さもそこに書いてある」

建物と造園も含めて考えているから、それぞれの設計図が出来上がってから基礎にとりかかるので、実際の着工はまだまだ先の話になります」

「うん」と相槌を打ちながら琢磨は図面を見た。

「これって、隣街だよな？」

「そうそう、高速に案外近いところよ」

「インターの手前を回り込んでちよつと行ったところだろ？」

「わかる？」

「ああ、あの近所の道路作ったから」

「高速道路も関わってたんでしょ？」

「ああ」と琢磨が認めると、「やっぱりね」カンナは頷いた。

「まあ、時間のあるときに一度見ておいてよ。ついでがあったらだけど」

「わかった」

「私がどうしてここに電話したかと言うと、公共工事もたくさん経験があつて

しかも信用できる仕事をするからなの」

「ほお。なぜわかる？」

「中学の同級生だもの」と言つてカンナが笑つた。

「例えば、工事中に起こりうるいろんなことを考えるとね・・・」とカンナは一息ついた。

「基礎の鉄筋、つていつのかな、鉄のワイヤーを組んでコンクリートを流すでしょ？」

そのときに、ゴミとかも混ぜちゃう人がいるんだってね。

タバコの吸殻とかコーラの空き缶とか・・・いろんなものが落ちちゃうらしいんだけど」

カンナはニヤニヤしながら話している。

「貴方ならそういうところにまでちゃんと気を配ってくれるような

気がする」

「それは当然だろ」と言つて琢磨は、「同級生なんだから。特別サ―ビスで空き缶が落ちないようにすればいいんだろ?」とニヤリと笑つた。

「ありがと。じゃ、これで土木関係の業者は決まつたわね」と言いながら、カナナは椅子に座りなおした。

「さて、肝心の建物なんだけど、設計だけ東京の建築家に作らせてもいいかしら?」

「ああ」

「その場合、いわゆる普通じゃ考えられないような図面が来ても大丈夫?」

「ちゃんとした設計図さえあれば、その通りに作ればいいんだから楽だよ」

「ひとつ私が躊躇しているのは、有名な建築家の先生つて施主の言うことを聞いてくれないのよ・・・ね」

「ああ、そうだな」

「自分が建てたいものを作るから、私の意向は・・・まあ、聞いてもらえないことが多い」

「そんなものじゃないか?」

「そうなのよ。そんなものなのよね」

カナナは言葉を選んでいるようだった。

「私にもプランっていうものがあるんだから、この田舎でも、比較的しっかりした建築の経験者で、ある程度施主の意向にも耳を貸してもらえるような設計してくれる人は居ないかしら?」

「うゝゝん」

「ついでに造園家とも連携してる人が居ればいいんだけど」

「連携してなくても、ちゃんとやる人は居るよ」

「まあ、それはそうなんだけど。私としては自分で切ったり叩いたりできないから、工事が始まる前に打ち合わせを充分にしておいて、実際に始まったらあとは待つてるだけってのが望ましいんだけど。」

琢磨は黙ったまま考え込んでいる。

もちろん琢磨には建築家でも設計者でも、何人も知ってはいたが、果たして最後までこの施主を扱いきれるのかどうか、相性が良くないと最悪の事態も予想できる。

「できれば、役所とか学校とか、ある程度大きな建物を作った経験がある人がのぞましいわ」

「う〜ん」

「お茶のおかわりをいただいていいかしら？」とカンナは首をすこし傾けてニツコリと微笑んだ。

入れ替えてもらったお茶を飲みながら、カンナは思い出したように言った。

「この会社、貴方が継いだのね。お兄さんが居たと思ったけれど」

「ああ、兄貴は土木は嫌だって設計のほうやってる」

「家の設計？」

「ああ、一級建築士だ」

「兄弟で組んでやることも多いの？」

「土木は入札の仕事が多いからな。でもたまに同じものを手がける時もあるよ」

「そうなんだ。お兄さんって学校とか建てたことある？」

「ああ、結構やってる」

「そっか」とカンナも考え込んでいるようだったが、

「お兄さんの会社に打診してもらえないかな？」と言った。

もしかしてコイツは初めから兄貴を紹介してほしかったのかな、と琢磨は一瞬勘ぐった。

「打診じゃなくても、紹介だけしれくれたら後は私から電話するけど？」とカンナが言った。

それにはすぐに答えずに、図面を見て、「これって結構広いな」と言った。

「ま、現地を見に行けばわかるけど、写真もあります」と言って、カンナは一冊になったファイルを取り出した。

数枚の写真を見せながら土地の説明が続く。

「このように一部は宅地になっていて古い家が建ってるから、この場所をメインにできるけど、他には一応同じ宅地で登記されていても畑になっている部分があるの」

角度を変えた写真を見せながら、「全体の傾斜はこちらに流れてて・・・、6mの道路に面したほぼ平坦な土地だから工事は簡単よ」と人差し指で写真の上をなぞりながら説明していく。

細くてしなやかな指だ。爪は適度な長さで綺麗な色に塗られていた。

「ところで、そのお兄さんはどんな建物を設計したの？」

「俺達が通っていた中学も兄貴のところだったなあ。もちろん基礎は俺んところだったけど」

「へえ」

「あ、市民病院も、消防署もだな」

「そうなんだ。消防署って本部の？」

「ああ、そうだよ」

「ふん。あの消防署って結構カッコ良いなと思ったんだわ」

なるべく気軽さを装って聞きながらもカンナは、あとで中学校と病院を見にいこうと思っていた。

「あ、それ見ていいか？」とカンナが持っているファイルを指差した。

「ええ、良いけど？言葉で説明し難いから、好きな建物とかインテリアの写真を集めているだけなんだけどね」と言いながらファイルを琢磨から見易いようにして広げた。

アプローチから始まって、玄関ドア、花壇、家の概観やインテリアの参考写真が丁寧に整理されていた。

「ほら、私っているんなものの固有名詞を知らないから、ビジュアルで説明できるようにと思って」

と恥ずかしそうに頬を赤らめた。

そのファイルは素人の割にはよく出来ていた。

各スタイルが色別になっていて見易い。

さらにファイルの後半は硬質な素材とテキスタイルに別れていた。

日本のものだけに限らず、海外の写真もあった。

「よくまとまってるじゃないか」とざっと見て琢磨が言うと、「暇だから」とだけ言ってカンナがまた笑った。

琢磨はまた最初の土地の図面に戻り、「それにしても結構広くないか？ここ」と言うと、

「そうでもないよ。まあ都会に比べたら広いかもしれないけど」とカンナが琢磨から戻された自分のファイルをパラパラと捲りながら答えた。

「家族で住むのか？」

「ん〜、どうなるのかな。親は今の家があるし、いずれは親の面倒見るのかなと思うけど、当分は私一人だと思う」

「そうか」とだけ言って、琢磨は携帯電話を取り上げた。

「兄貴？今良いか？」と琢磨は一級建築士の兄に電話した。

琢磨が電話を終えると、カンナは嬉しそうにニヤッと笑った。机を回り込んで、名刺を一枚出す。

カンナはその名刺を大事そうに受け取って、「じゃ、家に帰ったら電話してみる」と言った。

「ああ。今も聞いていたとおり、ほんとにつなぎだけとったから、あとは自分でやってくれ。まあ、心配してないけどな」

「はい。自力でなんとかしますわ。秋吉君に連絡取るのはかなりあとなると思うけど、気長に待ってて」

いつのまにか秋吉社長から秋吉君に変わっている。

20年少々会ってなかったことを感じさせず、同級生の会話になっていた。

「そうだ、お前の電話番号聞いておこうか」

琢磨がそう言うのとカンナは素直に頷いて、電話番号を交換した。

「とりあえず、名刺も渡しておくね」とカンナから差し出された名刺には名前だけが印刷されていた。

裏を返すと、小さく住所と電話番号が書いてある。

「とりあえず連絡先が必要かと思って、急いで作ってきた」とカンナは言った。

「んじゃ、俺の名刺も渡しておくわ」と言って琢磨が名刺を出すと、「サンキュー」と小さく言っただけでカンナはそれも大事そうにバッグに仕舞った。

「そういえば同窓会とか来てないな。他にも4〜5人では集まることあるんだよ。連絡しようか？」と琢磨が言うと、

カンナは少し考えていたが、「一応、まだ自分はそのうちのいらないかも……。あまり覚えてない人が多いんだよね」とやんわり断ってきた。

「いや、滅多に無いし、そのうちってことで」と琢磨もあまり勧めずにおいた。

正吾が言っていたようにカンナが離婚して戻ってきたのなら、しばらくは誰にも会いたくはないだろう。

カンナが車を運転して出て行くのを見送りながら、お互いに個人的な近況を尋ねなかつたことに気がついた。

カンナは設計士を紹介して欲しいと言って、兄貴の名刺を持って帰ったわけだから目的は果たしたことになる。

そんなものかと琢磨は思ったが、そういえば携帯番号を交換したのを思い出した。

ただ、カンナには用がなければ電話をしてはいけないような気がしていた。

上着を取り上げて車の鍵を確かめた。

「現場に行つて来る」と事務員に言残して、もつすぐ終了するはずの工事現場に向かった。

現場に到着すると、琢磨の右腕として働いている玉置たまきが寄つてきて状況を説明する。

4月から年度替りになるので、今月中に終わらせないといけない工事だ。

納期に遅れるとつぎの公共工事を取るのは難しかった。

ひとつひとつに頷きながら現場を見渡していると、電話の着信があった。

長兄の満みつるからだった。

玉置に手を上げてから少し離れて電話に出た。

「さつき電話で言っていた女性から電話があつたよ。小野寺って言うてたけどその人だろ？」

「ああ、同級生だつたんだ」

「一応、話を聞くことになった。来週、事務所に来ることになったよ」

「そうなんだ。まあ、適当によろしく」

「わかった。ところで、どのくらいの大きさになりそうなんだ？」

「忙しいの？兄貴は」

「これから着工のを1つ抱えてるくらいさ」

「ん〜。土地の図面を見ただけけど、あ、写真も見たけど。楽な形状をしている。ただ、結構広いよ」

「そっか。で、どのくらい？」

「家の大きさはわからんが、土地は、5000？は軽くある」

「え？」

「坪だと1500ちよいだ」

「ふ〜ん」

満はしばらく考えこんでいた。

「電話をかけてきた女性が施主か？」

「うん。そのようだ」

「大丈夫かな？」

「それは兄貴が調べろよ」

「いいのか？」

「同級生だったんだから、俺は調べたくないよ。財布の中まで見るのは失礼だろう」

「お前が失礼つてのは・・・笑える」と満はほんとうに笑った。

「ただ、今日小野寺に会ったけど、服装は半端じゃなかった」

「ほお」

「兄貴も会えばわかるよ」

「そうか」

「じゃ、現場なんでもう切るよ。調べてヤバそうだったら知らせてくれよ」

「ああ、わかった」

「じゃあな」と言つて、兄貴からかけてきた電話だったが琢磨のほうから電話を切った。

琢磨は、カンナの華奢な手首にまるで腕の一部のように付いていた腕時計のブランドを知っていた。

最高級車が軽く買える値段のはずだ。

兄貴は念のためにカンナの資金背景を調べるだろう。

それは仕事を引き受ける前に必ずすることだ。

琢磨はただその役を自分がしたくなかった。

現場での確認が終わって帰り道に、携帯にメール受信のお知らせがあった。

事務所に車を停めて、携帯を開けるとカンナからのメールだった。

『今日はありがとうございました。さっそく秋吉設計さんに電話して、来週アポがとれました』とだけのメッセージだった。カンナらしいと思いつながら琢磨は車を降りた。

琢磨の会社は、以前は秋吉組と言っていた。

それを父が時代の流れだと言って秋吉土木建築株式会社に変えたのだが、琢磨は近々社名を変更しようと思っている。

兄のところが秋吉設計建築事務所なので紛らわしい。

それに、引退したといつてもまだまだ元気で、とんでもないことを言い出す父親への牽制もあった。

いろんなことを考えていると職人たちが帰ってくる時間になったらしい。

事務所がにわか騒がしくなった。

玉置を呼んで、工事の終了日を言い渡す。

「来週の火曜日にあげてくれ」と琢磨が言つと、「キツイですよ、火曜日は」

「日曜日もやれるだろう?」

「そりゃやれと言われればやりますけど、皆はどうかな・・・」

「3月末が忙しいというのはわかっていることじゃないか」

「はぁ・・・」と即答しない。

「俺から言えばいいか?」

「そうしてもらえると助かります。若の命令だったら皆やりますよ」

「若は止めるって。せめて社長と言え」と笑いながらロツカールー

ムに移動した。

「皆、聞いてくれ！」琢磨が声を出すと、皆一斉に琢磨のほうを見る。

「これから完成までは酒は禁止だ」

「え〜〜、そんな〜」「横暴ですよ〜」「酒抜きとは人生まっくらだ」とか口々に騒ぎ始める。

「いつものことじゃないか」と琢磨が笑いながら、「来週火曜日までに今の現場を終わる」

「ひえ〜、マジですか？」「やっぱり・・・」「3月だもんなあ」といゝんな声上がる。

年度末恒例のことなので、従業員もすでに半分諦めモードだ。

「少々無理してもらわなければならぬ。そういう時は事故も起き易いので、十分に注意してくれ。詳細は玉置が言うから」
まともな返事をする者は誰もいなかった。

「その代わりに、終わった日は食べ放題、飲み放題だ！」

「やった〜！」「頼みますよ〜！」「抱き放題もつけてくれ〜」と勝手なことを言っている。

「工期はずすと、次の仕事が来ないからな。飯のため家族ために頑張るように！」
「と言いついて、あとは玉置に任せて琢磨はロッカールームを出た。」

翌日からは琢磨も現場に出た。

ほとんどは監督仕事なのだが、手伝えるところは手伝うことにしている。

そして皆が休日出勤している日曜日、琢磨は妻と長女を車に乗せて空港まで送っていった。

東京の大学に入学した長女の住まいや身の回りを整えるため、早めに上京するのだそうだ。

街から電車を乗り継ぐより、車で1時間半ほどの空港まで行ってそこから飛行機を使ったほうが断然早いのだ。

妻は車の中でずっと東京のデパートの話をしていたが、最後に琢磨に長男と次女の世話を頼んだ。

「どうやら2人の子供たちのことを忘れていなかったらしい。

「はいはい」と苦笑しながら返事を返した琢磨だ。

長女と妻のチェックインを終え、売店などを見ている二人の後ろをぶらぶらと歩いて歩いているときだった。

スレンダーな良い女が居るなと思ったら、カンナが何か品物を手にとって見ていた。

箱をレジに持って行って会計を終えたカンナが振り返った時、琢磨と目があった。

だが、二人とも声をかけなかった。

ほんのかすかに頭を下げたカンナはそのままターミナルの出口に歩き出し、琢磨は長女に「もう行くから」と言われて、妻と長女に向き直った。

二人を見送り、ターミナルの出口を出たところで、カンナがバス乗り場で時間表を見ているのが目に入った。

カンナはバスの時刻表を見つめていた。

琢磨がそのまま観察していると、腕時計と時刻表を見比べて、彼女はほおつとため息をついた。

カンナの顔が動き、何かを探しているようだ。

隣のバスの停車位置まで行き、また時刻表を睨んでいる。

ぱつと見には小さく見えないのだが、女性としては普通くらいの身長だろうか。

手も足も細くてしなやかそうな印象だ。ふつくらと膨らんだ髪型が細いうなじをさらに強調しているように思えた。

風に揺れる髪が邪魔になるのか、手でかき上げる様に髪を押さえて頭を動かすと琢磨のほうを見た。

ようやく琢磨に気がついたらしい。

ほんの少しの間をおいて、カンナは抗議するような目になった。

琢磨はゆっくりとカンナに近づいて、「よおっ！」と手を上げた。

「いつから見てたの？」

「ほんの少し前からだよ」

「いつから？」 キツイ声で聞いてくる。

「あつちの時刻表を見てたのは知ってたかな・・・」

「酷いわね、こそこそ見てるなんて」

「こそこそなんか見て無いぞ。出てきたらたまたま見えただけだ」

「煙草吸ってたのね」

カンナはクスツと笑った。

別に怒っているわけじゃないことがわかって琢磨もほっとする。

「どこかに行つて来たのか？」

「うん。ちょっとね」

カンナはそれ以上は言わなかった。

「誰かを迎えに来たの？」とカンナが聞いた。

「いや、娘が東京に行くって言っから送っただけだ」

「ふん」

「帰るのか？一緒に乗って帰るか？」

カンナは少し考えていたが、「迷惑じゃなかったら乗せてもらおうかな」と言った。

「じゃ、車はあっちだ」と言って駐車場のほうを指差した。

車までの間、並んで歩きながら、「さっきの娘さん？」とカンナが聞いてきた。

「見てたのか？」

「ちらつとね」

「一緒に居たのは奥さん？」

「ああ」

娘が東京の大学に入学するので付き添いだと琢磨は説明した。

助手席を開けてやると、「あら、こっちでも良いのに」と後部座席を指差しながらカンナが笑っ言っした。

「何様だよ」と琢磨は呆れて言い返したが、「あはは、助手席でも良いよ」と言ってカンナがすべるように助手席に座った。

座る時にカンナの足首が見えたが、見ないフリをして琢磨は運転席に回る。

琢磨が車を発進させて駐車場を出ると、「この車、乗り心地良いわね」とカンナが言っした。

「そうか？」と琢磨は何気ないように返したが、「さすがだわ。ちゃんと調整しててでしょ？」とカンナが言っ。

「まあ、普通には」と琢磨は答えたが、足回りは気になるので自分の車は昔なじみの修理工場に持って行ってマメに調整してもらっていた。

「音楽かけてもいい？」とカンナが聞くので、「好きな聞いていぞ」と言うと、FM局の1つを選んだ。

それからはしばらく何も話さずに運転していた。

「そうだ、腹空いてないか？」と琢磨が沈黙を破った。

「え？ああ、お昼ご飯？」

「ああ、途中で軽く食べないか？」

「そうだね」

「途中で食べて、お前を送っていったら現場に直接行くからちよūdと良い」と琢磨が言うと、

「何食べる？」とカンナが聞いたので、了承したのらうと琢磨は思った。

「何でも」

「蕎麦？うどん？ラーメン？洋食？中華？」とカンナが次々に聞く。

「どつちかと言うと和食系のほうがいいな」と琢磨が言うと、「うゝゝん」とカンナは考えていたが、

「次のインターで降りてもらってもいい？」と言った。

「良いけど・・・？」と琢磨は言ったものの、次の出口は山の中だ。

「ちよい、ゆっくりめに走ってて」と言ってカンナは電話を掛け始めた。

どうやら知り合いの店らしい。

現在地を言つて、あまり時間がないから到着したらすぐに食べたいと頼んでいる。

親指と人差し指で丸と作つて琢磨に知らせ、カンナは礼を言つてか

ら電話を切った。

カナナは「インター降りたらほんの数分だから」と言って、琢磨に道の説明を始めた。

高速を降りて5分ほどだった。

有名な温泉地の端っこに位置する旅館の別館で、昼食だけ一般客をとっているらしい。

近くにはゴルフ場も点在するので結構利用客の多い温泉地だ。

カナナの誘導で建物に一番近い駐車スペースに車を止めると、あたりを見渡して「こんなところにあるなんて知らなかったなあ」と感心したように琢磨が呟いた。

車の音を聞きつけたのか、店の人が近づいてきた。

「ようこそ。よくお出でくださいました」と係りの女性が丁寧に礼をした。

「こちらこそご無沙汰しております、女将さん」とカナナが言っている。

「とりあえず中に・・・」と言って二人は女将の案内で小ぶりの部屋に通された。

カナナが先に下座についたので、琢磨は自然に上座に座ることになった。つてしまった。

「ご紹介しますね。こちらはここの女将さん。以前から親しくさせていただいているの。」

そしてこちらは中学時代の同級生で秋吉さん。空港でばったり会って、帰り道が同じだから送ってもらってるの」とカナナは卒なくふたりを紹介した。

そう言ってる合間にも他の女性が、お絞りとお茶を運んできた。

「本館はほんとに建物は広いんだけど、お庭はこの別館のほうが侘びてて好きなんです」とカンナが琢磨に説明する。琢磨は「この庭は落ち着きますね。時間をかけないとこの風情はできなんでしょう」と女将とカンナに頷いた。

「秋吉さまは、ゴルフもなさるのでしょうか？この近くはゴルフ場も多いですから、お近くにいらしたらいつでもお寄りくださいませ」と女将が言う。

カンナは驚いたように「この女将さんが滅多にこういうことは言わないのに」と笑った。

すでに料理も並べられていて、「今日はお急ぎと言うことですから、次回はゆっくりとお話させてください」と言って料理を勧める。

「今日はお弁当仕立にさせていただきました」と言って礼をして女将は下がっていった。

「さ、温かいうちに食べましょう」と琢磨に箸をとることを勧める。蓋をとると色鮮やかな料理が箱に詰まっていた。

味噌汁の出汁の香りがただよって、琢磨は急に空腹を感じた。

二人は黙々と料理を食べた。

琢磨はご飯と味噌汁をお替りして、部屋の隅に待機していた女性が給仕してくれる間だけカンナは口を開いた。

「ここで正花堂弁当しょうかていどうを食べるのは久しぶりだね。普通は一品ずつ出てる懐石なのよ」

「そうなんだ」

「急ぎの時だけお弁当にしてくれるから・・・」と言つと、二人はまた黙って食事を続けた。

食事が終わると、すぐにデザートとお茶が出された。

カンナは「ちよつと失礼します」と言つて席を立った。化粧直しにでも行くのだろう。

給仕の係りが「こちらのわらび餅は本蕨ほんわじを使つており、風味を活かすためにあまり甘くしておりません。どうぞお召し上がり下さい」と琢磨に勧めるので、一口食べてみた。

ほんとうに甘くなく、するすると入つてしまふあつという間に全部食べてしまった。

席に戻つてきたカンナも嬉しそうに「あ、蕨餅わじ餅だ！」と言つて、嬉しそうに一気に食べてしまふと、「さ、行きましよう」と再び立ち上がった。

玄関には女将も見送りに出てきて、「またお越し下さい」と頭を下げる。

カンナは「調理長にお礼をお願いしますね。急で申し訳ないとお伝えください」と声をかけると、「あの人はカンナ様の言うことならなんでも嬉しいんです」と女将は嬉しそうに笑つた。

「では、秋吉さま。運転お気をつけて。是非またお越しくださいませ」と琢磨にも丁寧な礼をした。

車に戻つて、何人かに見送られながら高速道路に戻る。

「あ、お会計してない」と琢磨が急に気がついて大きな声を出した。

「いいのよ。今日は送ってもらふんだから、私のほうで」

「そんなわけには・・・」

「ほんと。あまり高くないし。気にしないで」

琢磨が口を開こうとすると、「じゃ、高速代も半分出させて」とカンナが言つた。

「アホか。気にするなよ」

「じゃ、お昼代も気にしないで」と言う。
琢磨は思わず笑って、「じゃ、ご馳走になるよ」と言うとカンナはニヤリと笑った。

「空港で何処行きのバスに乗ろうとしてたんだ？」と琢磨は運転しながら聞いてみた。

「高速バスに乗ろうか、それとも神戸か大阪に寄り道してから帰ろうかと思ってたの」

「そっか。東京に行ったたのか？」

「うん」とカンナは頷いた。

「まだあつちにも荷物が残ってるから・・・」とぼつりと言う。

「東京にか？」

「そうなのよ。まあ、全部実家に送るのもなんだかなあと思ってね」

「それで早く家が欲しいのか？」と琢磨は茶化した。

「そうかもしれないわねえ」とカンナが何か考えながら答えた。

「時々は東京に行くこともあるの？」としばらく黙っていたカンナが唐突に聞いてきた。

「ん、東京は滅多にないな」

「じゃ、神戸や大阪は？」

「それは時々ある。県庁に行くこともあるから」

「だよ。テリトリーとしては3県くらいにまたがって仕事してるんじゃないの？」

「ああ、そのとおりだ。役所に行くか、組合の会合とかだな」

「接待とかも？」

「ああ、そういうのも時々あるよ。昔ほどではないけどね」

「法律でいろいろ規制されてるとは聞くけど、ほんとうなのね」「親父たちの時代とは違うさ」と言って琢磨は笑った。

住んでる街が近くなり、高速を出る準備で車線変更する。

もう少しカンナと話していたかったが、カンナを実家の前で降ろさなければならぬ。

到着すると、「今日はありがとう」とだけ言ってカンナは実に優雅に車を降りた。

琢磨は「ああ！」と言って手を上げただけだ。

そのまま走り去る車が角を曲って見えなくなるまでカンナは見送っていた。

カンナが家に入ると、もうすでに定年退職して家に居る父親がリビングに居た。

「帰ってきたのか。早かったな」と言っただけでカンナを迎える。

どうせ車の音を聞きつけてそわそわしていたに違いない。

「うん。空港で同級生にばったり会って、帰りに乗せてもらったから」

「そうか。誰だ？」

カンナは父親が昔から変わってないので笑いそうになった。

友達と遊びに行くときも、友達が遊びにくるときも、誰なのかいちいち知りたかった。

塾や稽古事の時も時間が許す限り送り迎えしてくれた。

今もカンナにお茶を淹れようとしながらいろいろ質問する気だ。

「秋吉組の次男よ」

「同級だったか？」

「うん。中学のとき同じクラスだった」

「秋吉組は確か、兄貴が居たはずだよな？次男が土木のほうを継いで長男は・・・」

「一級建築士なんだって」

「ああ、役所の近くの秋吉設計か」

カンナの父親は市役所勤めの公務員だった。

定年になるまで真面目に勤め、今は年金生活者である。

若い頃はもつと田舎の出張所に勤めていた。

カンナが中学生になるときに、役場から市役所に移動になって引っ

越してきたのだ。

元々こちらが地元なので、昔からこの近辺に住んでいる家族のことはよく知っていた。

「あそこは、両親はまだ健在だったよな、確か。」

親父さんが結構元気な人で、それに比べて奥さんは・・・家に居るのが全然出てこなくて、大人しい控え目な人だわ」

「パパと同年代なの？」

「うん。あっちのほうがちょっと上のはずだ」

父親は何かを思い出したのかニヤニヤしながら、「役所に来るとすぐわかるんだよ。声が大きいから」と言った。

「もう如何にもそれっぽい人なの？父親って」

「ああ、あれはかなり柄が悪いで」

「私の同級生もやっぱり土木屋さんって雰囲気はあるよ。まあ、品はそんなに悪くないけどね」

「時代が違うからなあ、親の世代とは」

思わぬところで秋吉の情報を得て、カンナは得した気分になった。

「あの親父さん、外にも子供が居たのと違ったかな・・・忘れてけど」

「へえ〜。モテたのね」

「まあ、あんな人だから愛人の一人や二人居ても不思議じゃないだろ」と父親はひとりごちている。

「今度、秋吉設計にお世話になるかもしれない」とカンナが父親に言うと、

「家、建てるのか？」と驚いた顔で聞いてきた。

「うん。まだ考えてるところだけど、インターのところの土地も気になるし、時間もあるし」

「ここに居ればいいじゃないか」

「まだ決めてないし、秋吉設計が引き受けるかどうかもわかんないしね。
それにすぐに建てるってわけでもないから、まだ2〜3年はここに居るわよ」とカンナが言うと、
父親はとたんに嬉しそうな顔になって、
「ま、ゆっくりやりなさい」と言った。

「木曜日に秋吉設計に行くことになってるの」
「そうか」

「その前にね、ここにちょっと私の事務スペース作って良い？」
「いいけど、どこに？」

「2階の私の部屋の向かいが物置になってるじゃない？あそこをちよつと片付けてさ・・・」
父親は「好きにしなさい」と言ってくれた。

「それから、パパのファックスマシンを買い換えたいんだけど、いかな？」

「なんでだ？あれでダメなのか？」
「あのね、普通紙に印刷できるのが良いのよ。今は感熱式じゃない？たくさん書類が届いたらちよつと無理があるから」

「でも、数日前にファックスの用紙が特価だったので買い込んでしまったんだよ」

「そうなんだ。じゃ、私は私でなんとかするかな」

「ロール紙が無くなったら買い換えるか？」

「うん、そうしてくれると助かる」

「じゃ、俺はちよつと物置見てくるか」と言って立ち上がったので、カンナも「私も荷物置きに行くわ」と父親の後について二階に上がった。

カナナが中学生になるときに父がローンで建てた家だ。もうかなり時代遅れの家だが、育ってきた家でもある。二階の6畳ほどの洋間が昔からカナナの部屋だった。

ベッドの上にバッグを置いて、父親が覗き込んでいる向かいの三畳間を覗いてみる。

「へえ、意外に片付いてるじゃないの」とカナナが感心したように言うと、

「お前たちが小さい頃は、母さんのミシン部屋だったんだぞ」と父親が懐かしそうに話した。

「ああ、そうだね。いろいろ作ってくれてた記憶があるわよ」

「今は婆さんの世話で、長く使ってないからな」

カナナの母は、自分の母親の病気の世話で去年から実家に行っている。

長患いの上に、看病していた母の妹も看病疲れで倒れてしまい、二人の病人を抱えて目が離せないらしい。

2〜3週間に一度帰宅するらしいが、ほとんど家に居なかった。

「ママに電話しなくちゃね」

「ああ、そうだな。あとで俺が電話するとき話しておくよ」

「そうしてくれると助かる。ママって電話が長くなるから」とカナナが言うと、

「明るい性格だから病人には良いかもしれないなあ」と父が笑った。

片付けるのにそれほど時間はかからないと思って、カナナが家具の配置を考えていると家の電話が鳴った。

「きつと母さんだよ」と父が言うので、「私もそう思う。パパ、お

願いな」とカンナが言うと、「任せておけ!」と言っていていそいそと電話のほうに向かって行った。

その間にカンナは電話線の配置を確かめた。

固定電話は一階のリビングにメインがあつて、2個の子機を両親の部屋と玄関においてある。

じゃ、二階の廊下の電話は・・・?と見ると、父が今使っている二階の電話には電話線がなくなっていた。
しめた!とカンナは内心ほくそ笑んだ。

父は母との電話を終わると、「明日、母さんが帰ってくるらしい」

「あ、ちよつど良かったね」

「迎えに行つてくるよ」

「うん。じゃ、私はママにご飯でも作るわ」

「ああ、そうしてやつてくれ。婆さん、肺炎を起こして入院したんだつて」

「あらま、良くないの?」

「念のためらしいけど、入院すると完全看護だから、母さんも少し骨休めできるさ」

「なるほどね。でも心配だよな」

「そうだな。でもこれが年老いるということだからな」

「お祖母さんはまだ良いよ。伯父さんも叔母さんも居るんだから」

「それに婆さん、最近ちよつと痴呆がでてきたらしいよ」

「え〜!それはまた・・・」

「婆さんが嫁を嫌がつて寄せつけないので、母さんとその妹が行つてるんだよ」

「なるほどね」

「明日は久しぶりに賑やかになるなあ」とそれでも嬉しそうに父は階段をおりて行った。

すっかり物置のことは忘れたようだった。

「パパ、ミシン部屋のこと、ママはなんて言ってた？」
カナナは慌てて父親の後を追って階段を下りた。

母はカナナに部屋を使うことを許してくれたが、結局あと一日くらいは待てるだろうと父が言うので、母の帰りを待ってから机を運ぶことにした。

父と二人で夕食を食べると、父はTVを見ながら転寝している。晩酌のあとは決まってそうだった。

田舎の夜は長い。

カナナはすることが無いので、自室でメールチェックをすることにした。

メールアドレスは仕事用や個人用でいくつか持っていた。

たくさんメールが届くので、カナナ自身でチェックするのは2つだけと決めて、

他のアドレスのものはスタッフに管理を任せている。

仕分けをしたうえで、必要なものだけ知らせてくるようにしていた。ひとつは財産管理用と思って以前から使っているアドレスで、もうひとつは離婚後に取得したアドレスで弁護士と会計士とのホットラインになっていた。

弁護士からと会計士からメールが届いていた。

昨日面談したばかりなのに、もう何かあったのかと眉をひそめた。

案の定、どちらのメールも元旦那から連絡があったという報告だった。

弁護士のほうはそれに加えて、元旦那とその新しい妻が東京でカナの悪口を言いふらしているようだと言っていた。

仕方ない人たちである。

おバカなカップルを思い出して、少し気が滅入った。

そもそも子供の出来ないカナに、恋人に子供が出来たので君とは別れると言われたのだ。

IT長者で派手な暮らしぶりの旦那に女が居るのは知ってはいたが、子供が出来たのでは仕方がないかと離婚話に応じたのは、そろそろ潮時かなと思っていたからだ。

体裁を気にする旦那は修羅場になって週刊誌を喜ばすことを避けて、二人で話し合っただけで離婚の条件を決めた。

夫の不義による離婚なのでカナにかなり有利な条件だった。

それでも間に誰かを入れて書類で取り交わしたほうが良いと説得して、弁護士に協議書を作ってもらい、それに基づいて財産を分けたのだ。

カナ側の弁護士はカナが貪欲になれば夫からもっと取れるんですよとアドバイスしてくれたが、長年一緒に暮らしたのだからとりあえずは夫も今のままの生活が出来るようにと手加減したのだった。

ところが、カナと離婚後あまり業績の芳しくない元旦那は、こんなはずじゃなかったと息巻いている新妻にそそのかされてか、カナに取られすぎたと言いがかりをつけてきている。

旦那側の弁護士でさえ「もう終わったことですから」と助言しているにも関わらず、しつこく言いがかりをつけてきていた。

元旦那の性格上ある程度は予想していたので、携帯電話もメールアドレスも新しいものを取得し、田舎の実家に引っ込んでいたのだ。

もうひとつのメールを開けると、その元旦那からメールが届いてい

た。

内容を読んでうんざりしたカンナは携帯電話を取り上げた。かけた先は弁護士のところだ。

「カンナです。今よろしいですか？」

「ちょうど今事務所の戸締りをしていたところですよ」

「タイミングよかったのかしら？」

「はい。メール読んでいただけましたか？」

「ええ。それとは別に元旦那からも直接メールが届いたんだけど」

「向こうの弁護士もかなり諫めてはいるらしいのですが・・・」と言葉を濁した。

「そのメールを明日そちらに転送しておきます」

「では、あとはこちらで引き受けますよ」

「すみません、いつも」

「いえいえ、それが私の仕事なので」

「それで、もうそろそろウザくなってきてるんだけど」とカンナは静かに言った。

カンナの弁護士、田所とはどこかのパーティーで知り合った。何度か同じパーティーで顔を合わせるうちに、話す機会も増えた。祖父の代からの弁護士一家で、父親はTVでも活躍している有名な企業弁護士だった。

物静かな田所は、主に顧問としてクライアントの財産を管理する弁護士をしているらしい。

実際の歳より老けてみえる田所と、若く見えるカンナは7歳も違うのに同年代に見られる。

ようやく僕にも個室がもらえたんですと嬉しそうに話していたことを今でもカンナは覚えていた。

それまでは弁護士というと、ややこしいところに乗り込んでいる法律家としか認識していなかったので、

黙って話を聞いてくれそうな気さくな田所を好ましく感じていた。

離婚するにあたって、離婚後の財産の管理もあるので田所の名刺を探し出し電話を掛けたのが始まりだ。

田所は話を聞いて上でいくつかのアドバイスをしてくれて、カンナは比較的簡単に離婚できたのだ。

今はカンナの第一顧問弁護士だ。

田所しか顧問弁護士はいないのだけど、必要にあわせて専門の弁護士を手配するようにもお願いしている。

元旦那からの火の粉を逃れるには他の弁護士を使うかもしれないなと、カンナは思った。

一方その頃琢磨は、目の前に迫った工事期限と二人の子供にやきもきしていた。

春休みで家にいるはずの子供はというと、長男が家に居たので次女が帰ってきたら夕飯を食べに行こうと電話をしておいたのに、一向に連絡が無かった。

現場は煌々と電気をつけて明るく、徹夜作業になるかもしれないと皆がテンション高く働いていた。

あと2日で終わる予定なので、そろそろ片付けの段取りもしなくてはならない。

ようやく長男に電話が繋がったと思ったら次女が帰ってないので連絡できなかったというのだ。

しかも長男は、明日は現場を手伝いたいと言い出した。

今までもアルバイトで手伝ったことがあるから良いのだが、何しろ受験生だ。

妻から勉強させるように口やかましく言われているので、琢磨は勉強を優先させたかった。

ところが長男は、「今日は一日中家に居たんだよ。明日と明後日くらい体を動かしてもいいだろうが」と言う。

春休みが終わって学校が始まればまた勉強の日々だからというので仕方なく許可を出した。

明日は事務所に来させて皆と一緒に現場入りさせよう。

手伝うといっても、撤収のための整理整頓くらいしかないが、それでも男の子のパワーは嬉しかった。

次女が気になるので、一度家に帰ることにした。

玉置にそれらのことを伝えると、わかりましたと返事があった。

琢磨の車が家の近くのコンビニの前を通ったとき、次女に良く似た後姿が見えた。

急ブレーキをかけコンビニの前に横付けして店内に入ってみると、次女が漫画を立ち読みしていた。

「こらっ！」と後ろから声を掛けると、次女はびくっとして振り返る。

「なんだ、パパか」

「なんだは無いだろう」

「脅かさないでよ」

驚いたのは琢磨だった。

次女の目の周りが黒くなっている。

「お前・・・化粧したのか？」

「あ・・・うん」と次女は焦ったような声を出した。

「なんか、パンダみたいだぞ」

「え〜？！ママのをちよつと借りただけど」

「お前なあ・・・まったく。まだ化粧はダメだって言われてなかったか？」

「イマドキ、皆してるよ〜。来週から高校生だし、常識だよ」

琢磨はちよつと考えて、近くのマガジンラックから一冊美容関係の女性誌を選んでレジに持っていった。

空いた手で次女の手を掴んで引つ張っていった。

お金を払って、雑誌を次女の手押し付ける。

「ママには内緒だぞ。これでちよつとは勉強してる」

「え〜？こんなのダサイよ」

「五月蠅い！どうでもいいから飯行こう」と、次女を車に押し込んで長男を迎えに行った。

長男に玄関先で散々笑われた次女はすっかり拗ねてしまったが、なんとか宥めて顔を洗わせてから3人で焼肉を食べに行った。

なんといても長男は食べ盛りだ。

それに琢磨は洋食より箸を使う食事のほうが好きだった。

ラーメンか焼肉か訊ねると二人とも「焼肉！！」と答えたので、いつも行く近所の焼肉屋に行った。

食べるだけ食べて、お腹が苦しくなった頃、長男がぼそと次女に言った。

「お前、あのさっきの化粧、似合ってたぞ」

「ほ、ほっといてよ」

「お前は可愛いんだから、ナチュラルマイクのほうが似合うはずだぞ」とも言った。

「・・・放っておいて」と言いながらも真っ赤な顔をして、「お手洗いに行つて来る」と次女は席を立てて行ってしまった。

残された長男と琢磨が顔を見合わせて肩を竦めると、焼肉屋の亭主が、「親子でそっくりのポーズだなあ」と言つて笑いながらテーブルの横を通つて行った。

「それにしても、お前、よくあんなことが言えるなあ」琢磨が感心して言つと、

「親父の真似してるだけさ」と言つて長男がしれつとして返した。

妻が東京から戻るのはまだ10日も先だ。
とりあえず明日と明後日はどうやって乗り切ろうか、琢磨は考えていた。

会計を済ませて外で待っていると次女が出てきたので、みんな歩いて帰る。

長男は明日は現場だ。

さて、次女をどうするか。放って置いたら何をするかわからない。家に二人の子供を置いて、住み込みのお手伝いさんに声をかけて琢磨は現場に戻った。

現場に戻ると別段変わったことはなく淡々と作業が続いている。

玉置が近づいてきたので、「今日、明日が山だな」と琢磨は声を掛けた。

「はい」

「様子はどうだ？」

「まだ心配はありませんが」

「ま、恒例のことだしな」

「はい。でも最近特に不景気ですからね。しかもあつちは3回連続で入札はずしていますから油断できませんよ」と玉置が答える。

一度納期に間に合わなければ次からは当分仕事をもらえない。

それがわかつているから、終了間際の工事現場には次の入札を狙っている同業者からの嫌がらせがある。

ライバルをひとつ蹴落とすのだ。

昔はもつと荒つぽかった。

今は規制もあるのでそれほど派手ではないものの、琢磨をライバル視している会社があって、何かと仕掛けてくる。

「準備はしておけよ」と言っつて、琢磨は携帯電話に手を伸ばした。

「あ、小野寺？夜分にすまん」

琢磨が電話をかけた相手はカンナだった。

「明日は何か予定があるか？」

「ん〜、家を空けられないんだけど」

「じゃ、好都合だ」

「え？」

「えっと・・・どこから話すかな」と迷っていたが、今日次女を見て思いついたことをカンナに話した。

「それ、無理だから。絶対に・・・」

「頼むよ！」

「ベビーシッターなんて無理よ」

「いや、今度高校生になる」

「一番微妙で扱いにくい年頃じゃん」

「他に居ないんだよ」

「私は危険物取り扱いの資格なんて持ってないし・・・」

「カンナ大明神！頼むよ」と押し切られ、

「まったく、しょうがないわね」。但し、両親が良いって言ったらだよ」と言っつてカンナは渋々承諾した。

昔から琢磨には憎めないところがあると思っつていたが、今さら思っつ出したところで仕方がない。

父親に話すと、夕方までならいいんじゃないかと言っているので、琢磨に「OK」と携帯メッセージを送った。

翌朝、きっかり9時に琢磨はカンナの家のチャイムを鳴らした。琢磨の隣には拗ねたような態度の次女、陽菜はるなが並んでいた。

「はい」と言っただアを開けた人を見た瞬間、陽菜は目を見開いて固まってしまっていた。妖精のような女性ひつが立っていると思った。確か父親の知り合いと言っていたが、いったいどんな知り合いなんだと思ってしまう。

「朝からすまん。こっちが次女の陽菜。今日はよろしく！」と父親が言っつのをぼんやり聞きながら、陽菜はなんだか良い匂いがすると思っていた。

「おい、陽菜、挨拶しろ！挨拶！こちらは小野寺さんだ。パパの同級生だ」

「ええ〜？！パパの？」
どう見たってまだ40歳は超えてないでしょうという女性がパパと同級生なのは信じられない。

陽菜は口をパクパクさせたまま二人の顔を交互に見比べて居た。

「しっかりしろ！金魚みたいに口開けやがって」と琢磨は言いながら、「こんな子だけど今日一日よろしく！いろいろ教えてやって」とカンナに言った。

「おはよう。陽菜ちゃんって言うのね。可愛いお名前ね」とその人

がふんわりと微笑んだ。

「あ、はい。オハヨウゴザイマス」とペコリと頭を下げる。

「今日は陽菜ちゃんのパパはお忙しいから、ここで我慢してね」と言う。

「いえ、とんでもないです。よろしくお願いします」と陽菜はまた頭を下げた。

すっかり態度の変わった陽菜を面白そうに見ながら、琢磨は「何かあったら電話くれ」と言い残して行ってしまった。

玄関に残されたカンナと陽菜は、しばらくそこに言葉もなく佇んでいた。

「あ、陽菜ちゃん、どうぞ入って」とカンナが言っただけでスリッパを出してくれた。

「はい」と返事して後をついていくと、リビングに通された。

「朝ご飯は？」

「あ、はい。食べてきました」

「偉いわねえ。朝ご飯食べるなんて」

「私はお茶だけでいいんだけど、朝のお茶の時間を一緒にしてくれるかしら？」

「は、はい」

なぜ妖精さんがこんな家に居るんだろうと陽菜は不思議に思った。

普通の古い小さな家だ。

こういう人はもっと違う、広くて新しいマンションのモデルルームのようなところが似合うはずだ。

新しいマンションのモデルルームというのが実際にどんなところかわからなかったが、イメージとして陽菜はそう思った。

カンナは紅茶を用意しながら、何を話して良いかわからなかった。

そのうち自然に話せるかもと思って、無言で紅茶を淹れる。

「こっち来る？」と陽菜をダイニングテーブルに誘った。

「はい」と言っただけで素直に移動してきた陽菜を見ると、どこからかみても田舎の中学生だ。

丸い顔に黒いストレートのせみロングの髪。

ただ、肌がつやつやしているのとはばれそうな目が可愛さを出していた。

少し手をいれてやれば可愛いお嬢さんになるだろう。

「陽菜ちゃんって呼んでいいかな？」

「はい」

「私は小野寺カンナといいます。聞いたとおりあなたのお父様と同級生だったのよ」

「信じられません」

「あはは、それは私が若く見えるって言うてくれるのかな？」

「はい。パパはどうみてもオジサンですし・・・」

「ほんとうなのよ。それよりも私のことはカンナって呼んでちょうだいな」

「はい、カンナさんですか？」

「うん、それで良いわ」とにっこりカンナが微笑んだ。

陽菜は思わず見とれて、顔が熱くなるのを感じた。

そんな陽菜を小動物みたいで面白いと思いつつ、カンナは話を続けた。

「今日はね、宅配を待ってるの」

「そうだったんですか」

「注文してたものが届くのね。で、陽菜ちゃん、嫌じゃなかったら、運んだり組み立てたりするのを手伝ってくれないかな？」

「はい。良いですよ？」

「そう、助かるわ。午前中に届くはずよ」

陽菜はコクリと頷いた。

「この家は私と両親が住んでいるの。」

今日は父が母を迎えに出かけていて、午後になれば戻ってくるはず。帰ってきたら賑やかになるから覚悟しておいてね」

「はい」

「母はね、祖母が病気なので看病に行っているのよ。」

今日は久しぶりに家に戻ってくるので、たぶんすごくテンションが高くなるはず。

なので覚悟しておいてね。静かだった生活も今日で終わり・・・

「はぁ」

「ああ、テンションって興奮するってことね」

陽菜が頷くと、「陽菜ちゃんのお母様って静かな方なの？」とカナナが聞いた。

「いえ、口うるさいです」

「よかったわ。うちの母親だけが五月蠅いってわけじゃないのね。でも、たぶん陽菜ちゃんのお母様より10倍くらい五月蠅いから、我慢してね」

と真面目な顔をしてカナナが言うので、陽菜も真面目に頷いた。

「あら、可愛い指ね。ちょっと見せて？」とカナナは手を出した。

おずおずと陽菜が手を差し出すと、その手を取ったカナナが、「これ、マジックで塗ったの？」と聞いた。

「いえ・・・」と陽菜が首を横に振ると、「マネキュアなの？」と聞くので、今度はコクリと頷いた。

陽菜は急に自分の爪が恥ずかしくなった。

陽菜が手を引っ込めないようにしっかりと握ったカナナの指は、とてもきれいな飾りがついていた。

揃えられ、きれいな色に塗って模様が描かれている。きらきら光る石も乗っていた。

「マネキュアどこで買ったの？」と聞かれたのだが、答えられないでいると、「コンビニ？」と聞かれたので再び頷いた。

カナナは「ちよつと待っててね」とバタバタとどこかに走って行き、すぐに戻ってきた。

「私ね、子供も居ないし妹も居ないので、あまりこういうことはやったことないんだけど・・・」と言いながら、手に持ってきた箱を開けいくつか小さな小瓶を出した。

「これなんかどうかな？」と言って、淡いピンクのマネキュアを差し出す。

「それともこつちも良いかも」と2〜3個勧めてくれた。

「この色に塗ってみていいかしら？大丈夫？」と言うので、「はい」と小さな声で返事をする。

コットンに匂いのする液を染込ませて、陽菜の爪の上をそつと撫でた。

二回目は少し強めに擦っている。

「このくらいじゃないと取れないわね。ほら、きれいに取れた」と言ってカナナは満足そうに笑った。

「じゃ、陽菜ちゃん、自分でやってみる？」とコットンを差し出されたので、陽菜は頷いて受取った。

コットンは好きなだけ使っていていいからと言われて、全部の爪を擦り、黒いマネキュアを全部取った。

「じゃ、こつちに来て」と洗面所に案内されて、手を洗い、またりピング戻った。

「今度はこれを使うからね」とヤスリで爪を整えてくれる。

カナナから流れてくる甘い匂いにうっとりとしながら爪を任せてしまった陽菜は、もうどうなっても良いと夢心地だ。

やがて透明感のある薄いピンクに染まった陽菜は自分の爪を見て、「きれい・・・」と呟いていた。

「今は春休み中だからいいけど、学校が始まったらこうするのはダ

「メだからね」とカンナから念を押されて頷くしかなかったが、とりあえず今はこれで充分だった。

突然、ドアのチャイムが鳴って二人ともびっくりした。

宅急便をすっかり忘れていたのだ。

荷物の伝票に受取り印を押しながら、カンナは取って置き笑顔で、「今、他に人が居なくて……。できたら二階に置いてもらえないかしら？」と配達員に頼むと、二つ返事で全部の荷物を二階に運んでくれた。

カンナに頼まれると誰も断れない。

陽菜はこの人も一緒だなと荷物を運んでいる配達員を見ながら思った。

「よかった。全部揃ってる」カンナは二階の廊下に置かれた箱を確かめてそう言った。

「一体何なんですか？」と陽菜が聞くと、「ふふふ、私の遊び道具よ」とカンナが言っつて、「でもこの箱よりも今は陽菜ちゃんのほうだな・・・」と振り向いて頷いた。

陽菜は何のことかわからなかったが、「ダイニングで待っててね。すぐに行くから」というカンナの言葉に促されて階段を下りた。そう時間を置かずにカンナもダイニングに来たが、手になにかを持っている。

「陽菜ちゃんはまだ若いから、ファンデーションは必要ないのよ。でも、日焼け止めは塗ったほうが良いわ。ソバカスができるから困るからね」

ボトルを何本かと鏡をダイニングテーブルの上に置いてから、カナは陽菜をキッチンのシンクに誘った。

「顔を洗うときは何を使ってる？」そう言っ、石鹸の泡立て方、顔の洗い方を陽菜に教え、やってみるとい。

陽菜が教えられたとおりに顔を洗うと、次は化粧水をつけ、日焼け止めクリームを塗ってから透明のリップを差し出す。

少しピンク色がついているので、塗るとプルプル輝いて見えて、それだけで陽菜は幸せな気分になった。

「鏡を持っていてね」とカナは言っ、睫毛をくるんとさせるためのビューラーの使い方を教えてくれた。

最後に「目を閉じてて」とい、眉を少しだけ整えて陽菜への美容講座は終了した。

「目を開けて良いわよ」とカナが言っ、おそろおそろ鏡を見てみると、ほんの少しのことで数段可愛い自分が映っていた。

「うわ〜！凄いです、カナさん！ありがとうございます」

「それはね、陽菜ちゃんが元々可愛いからよ」そう言っ、カナも微笑んだ。

「眉は自分でカットしちゃだめよ。切りすぎると取り返しがつかないから」とカナは注意を与えた。

「はい」と陽菜は返事をして、洗顔やビューラーの使い方を忘れないように、家に帰ったら練習しようと思っ。

「さて、二階の箱を開ける前に、エネルギーの補給をしましょう。一緒にカレーライス食べない？」とカナが誘っ、一緒にお昼

飯を食べることになった。

ダイニングテーブルにランチョンマットを置いて、スプーンとフォークが出されたので、陽菜がそれをマットの上に並べた。

「作っておいたから、温めるだけなの」と言っつて、カナナは白いお皿にカレーライスを盛つて、冷蔵庫から小さなサラダを出した。

「美味しいです」と陽菜が言っつと、「ありがとう。一緒に食べると美味しいわね」とカナナが微笑んだ。

食べ終わったあとは、二階に上がつて二人で箱を開いた。

大きな箱や小さな箱のなかをひとつひとつ確認して、廊下に並べ、箱は必要なもの以外は全部潰して外に出した。

そうしていると、元気な声で「ただいま」とカナナの母が帰ってきた。

「おかえりなさい」

カンナはそう言いながら階段を下りて行った。

しばらく階下で話し声が聞こえていたが、やがてトントンという足音がして二階に上がってくる。

中年の女性とカンナが戻ってきた。

「この子かい？」

「そう、陽菜ちゃんっていうの」

「陽菜ちゃん、私の母です」と、カンナは陽菜と母を引き合わせた。

「秋吉陽菜です。こんにちわ」と陽菜が挨拶すると、

「んまあ、なんて可愛らしいお嬢さんかしら」と大げさに頬に手を当てて、「こんにちわ」と挨拶してくれた。

「お母さんに似て、良かったわね」と言っただけでカラカラ笑っている。

陽菜はどういうリアクションをして良いのかわからなかった。

「でね、ママ。この部屋なんだけど・・・」とカンナが話を变えて、母親の意識が陽菜を逸れたので、陽菜は内心ほっとした。

やがて話がまとまったようで、「好きにしていから。一段落したらダイニングへおいで。おやつ買ってきたからね」と言って、カンナの母親は階段を下りて行ってしまった。

入れ替わりにカンナの父親がやってきて、陽菜はまた緊張してしまっただ。

同じように簡単な挨拶を済ませると、今度は家具の移動が始まった。陽菜も少し手伝った。

埃っぽい部屋から古いミシンやいくつかの箱と筆筒を協力しながら別の部屋に運ぶと、カンナは窓を開けておいて、バケツに水を持ってきた。

陽菜にゴム手袋を渡す。

「さて、一緒に拭き掃除してもらおうかな」と言っつて、水を絞った雑巾を渡された。

狭い部屋なのであつという間に終わってしまった。

カンナは窓も拭いていた。

それが終わると、カンナの部屋から古い勉強机と一緒に運んだ。

「この机、私が子供の頃使っていたのよ」と話してくれた。

「カンナさん、高校はどこだったんですか？」

「あ、私はK高よ。秋吉君、陽菜ちゃんのお父様は、S工業高だったわね、確か」

話しながらカンナは雑巾を受取つて、バケツを持って立ち上がった。

「はい。カンナさん頭良かったんですね」

「そんなことないわよ。陽菜ちゃんはどこに決まったの？」

「・・・R女子高です」

「あら、素敵な高校じゃない。お嬢さんなのね」

「いえ、他に入れるところが無かったので・・・」

「じゃ、手を洗って・・・？」とハンドソープを渡されて、手を洗う。カンナも洗面所で隣に並んでソープを泡立てて手を洗った。

ハンドクリームをつけながら、「女の子は手を大事にしなくちゃね」と陽菜に微笑んだ。

「ママ、おやつ食べていい？」と奥の部屋に声をかけるとカンナの母親がダイニングに入ってきた。

「じゃ、皆でケーキの時間にしようか」と言っつて、冷蔵庫から大きな箱を取り出した。

カンナは飲み物の準備をしている。

「陽菜ちゃん、好きなを選んでいいよ」と小母さんが言っつて、箱の中を見せてくれた。

陽菜は散々迷っつてフルーツがたくさん乗ったタルトを選んだ。

陽菜の父親もやっつてきてダイニングテーブルで小さなお茶会が始まった。

「陽菜ちゃんは今度R女子に入学なんだっつて」とカンナが言っつと、「ほお。やっぱりお嬢さんなんだねえ」とカンナの母が感心したように言っつた。

「あそこは、家政科があっつただらう？」

「はい。私も家政科です」

「あ、陽菜ちゃん。うちのママはお裁縫得意なのよ。宿題とか困っつたらここへ持っつて来ると良いわよ」

「カンナは裁縫が全然ダメでさ、私が縫っつた物をへーキで提出してたんだよ」

「え〜？ほんとうですか？」

「誰だっつて出来ないことはあるわよ」とカンナはペロリを舌を出して肩を竦めた。

カンナの父親は何も言わっつずにお茶を飲んでいるだけだっつた。

「あ、そうだ！！」と突然カンナの母が立ち上がっつて、バタバタと

二階に上がって言った。

陽菜が驚いていると、「どうやら陽菜ちゃんのこと気に入ったようね」とカンナとその父親が顔を見合わせて頷いている。

「陽菜ちゃん、嫌なことは嫌だつて言わないとだめよ。うちの母は結構押しが強いから」と言つてカンナがニヤニヤしていると、カンナの母親が戻つてきた。

手に持っているものをテーブルに広げて、「これはカンナの上履き容れ、これはカンナのお稽古事バッグ・・・」と言いながら次々に陽菜に見せていく。

「ママのバッグは自慢だったわよ、私」と言いながら、カンナは席を立つてお皿などとシンクに運んだ。

確かに素人の小母さんが作ったとは思えないような可愛いバッグだった。

陽菜が手にとってバッグを見てみると、

「そしてこれ！どこかに仕舞つてたと思つてたんだよ。見つけたわ」とカンナの母が手にしたものをカンナに見せた。

「カンナ、ブラシ持つてきて」とカンナの母が言つと、カンナはすぐにヘアブラシを持つてきた。

陽菜は嫌な予感がした。

「どの色が良いかねえ」と言いながらカンナの母親が陽菜の後ろに立ち、あつという間に陽菜の髪にリボンをつけてしまった。

「女の子は毎日ブラッシングしないとダメだよ」と言つて、カンナの母親は陽菜の髪の毛を梳いている。

カンナの父親はいつの間にかリビングのソファアーに移動していた。

「陽菜ちゃん、入学式はいつだい？」と陽菜の髪を梳きながらカン

ナの母が聞いた。

「来週です」

「ふ〜ん。もうあまり時間がないじゃないか。もう必要なものは揃えた？」

「えつと・・・」

陽菜はよくわからなかった。

「学校から、入学までに揃える物の案内が届いているはずだけど・・・」とカンナの母が言う。

学校から郵便は届いていたが、陽菜はまだ読んでいなかった。

「制服は？もう取りに行った？」

「はい。制服と通学靴は買いました」

「そっか。じゃ、学校からのリストを明日持っておいで」

「え？明日ですか？」

「何か用事でもあるの？」

「いえ・・・」

また明日も来て良いものか、確か今日だけだとパパが言っていたはずだと陽菜は思った。

「陽菜ちゃんさえよければ、あとでお父様に聞いてみましょうか？」とカンナが言ってくれたので、陽菜は嬉しくなって「はいっ」と答えた。

「また来てもいいんですか？」と聞くと、「もちろん！」とカンナの母もカンナも言ってくれたのでほっとした。

「さて、そろそろ陽菜ちゃんを私に返してちょうだい。」

今から二階を手伝ってもらおうから」
そう言うとカンナは陽菜を促してダイニングから離れた。

カンナの簡単なオフィスを整えるために、陽菜は言われたものを箱から取り出し、

カンナが次々に収納していくのを見守った。

一番大きなものはプリンターで、カンナのPCとつないでいるんな設定を確認するのを見ていた。

「さて、ここからはちよつとたいへんよ」と言つて、カンナは長い線を取り出し、廊下の隅にある電話のところで作業を始めた。

「陽菜ちゃん、ちよつと手伝つて」と呼ばれたので近づいていくと、「私がこの線を壁や天井に留めていくから、作業し易いように線を持つててくれる?」と言つて、

電話のところから順番に、大きなホツチキスのようなものでケーブルを留め始めた。

小さな梯子も使つて丁寧に留めてしまうと、カンナはニヤリと笑つた。

これで、ファックスの心配はない。

父親のところへ届くファックスなどたかが知れている。

当分の間はカンナがファックス回線を乗っ取つたのには気がつくまい。

一段落したところに陽菜の父親から、今から迎えに行くご連絡が入つた。

カンナが明日は陽菜と一緒に買い物に行きたいとメッセージを送つてくれたおかげで、

明日も同じ時間にカンナの家に来ることになった。

もう使わないからと陽菜の爪に塗ったマネキュアを袋に入れて持たせ、父娘を見送ると、

玄関を入ってからカンナはため息をひとつ吐いた。

迎えに来た琢磨が、陽菜を見て少し驚いたようにしてたなと思うと笑いがこみ上げてくる。

賑やかな夕食のあとようやく開放されたカンナは、今日出来上がった自分の簡素なオフィスに入った。

PCを立ち上げて一日ぶりにメールチェックをする。

昔は充分な大きさだと思っていた机も、今では単に古びた小さな机だ。

椅子は・父の手作りだったことを思い出した。

東京の機能美を追求したシンプルモダンなオフィスとは違ってはいるが、これでも充分に用は足りる。

当分はこれで良いとカンナは思った。

メーラがメールを全部ダウンロードする間に、携帯電話を取って琢磨にメッセージを送った。

『陽菜ちゃんの学校からの案内を持たせてください。明日は入学までに必要なものを買い揃えようと思います。使った費用はあとで請求します』

送っておいてメールを次々に読んでいると、琢磨から着信があった。

「秋吉だけど、今いいか？」

「はい。お疲れ様です」

「今日はありがとな。陽菜がすっかり喜んで、小野寺の話ばかりしている」

「気に入ってもらえたようで嬉しいわ」

「明日も頼んでいいのか？」

「ええ、うちの母も陽菜ちゃんのこと気に入ったようで舞い上がってるわよ」

「小母さんが？」

「母も裁縫が得意だから、家政科に進んだ陽菜ちゃんに先輩風吹かせたいみたいよ」

「助かるよ、本当に」

「奥さんが不在中なのに悪いなとは思っけど、どうも陽菜ちゃんの入学式に間に合いそうにないから、気になって」

「長女がちよつと出来がいいから、陽菜のことは二の次だからな」

「明日は工事也大詰めなんですよ？」

「ああ」

「じゃ、時間気にしなくていいから。適当に買い物とか行ってくるわ」

「よろしくお願いします。車はあるのか？」

「ん〜、明日は家の車が使えそうだから大丈夫よ」

「お礼はちゃんとするよ」

「そんなの必要ないわよ。陽菜ちゃんはうちの母のおもちやになったりしてたいへんなんだから」

「そういう訳にはいかないよ」

「う〜ん。じゃ、今度時間ができたらとびつきり美味しいものご馳走してよ」

「ああ、わかった」

「じゃ、また明日ね。そっちは現場なの？」

「ああ、もう一晩徹夜だな」

「お仕事、頑張ってるね」

電話を終わったものの、琢磨はまだ電話を離せないでいた。

お仕事頑張ってるなんて言われたのは久しぶりのような気がした。

翌朝もちょうど9時にチャイムが鳴り、琢磨が陽菜を連れてやってきた。

「じゃ、よろしく頼むよ」と言つて、カンナに「とりあえずこれで・・・」とお金の入った封筒を預けて琢磨は現場に出かけていった。

家の中に入って昨日と同じようにお茶の準備をする。

4客あるお椀の一つを指して、「これ、父のところにお願いできるかな」とカンナが陽菜に頼んだ。

後ろを振り向くと、リビングでカンナの父が新聞を読んでいた。

居る気配が全然なかったなあと陽菜はびっくりしたものの、平常を装つてお茶を持っていった。

「あの、おはようございます。お茶をお持ちしました」
家のお手伝いさんの口調を真似て言ってみた。

「ああ、おはよう」とカンナの父親がにっこり笑ってくれたので、間違つてなかったと陽菜はほっとした。

奥からカンナの母がやってきて「おはよう、陽菜ちゃん」と挨拶をしてくれる。

家だと何も言わないことが多い陽菜だが、「おはようございます」と挨拶を返した。

「こっちでお茶をいただきましょう」とカンナの母に促されてダイニングテーブルにつく。

「早速だけど、学校からのリスト持ってきた？」と聞かれたので、手に持っていた封筒をテーブルの上に置いた。

「どれどれ・・・」と言つてカンナの母が封筒を開けて読み始めた。

今朝、東京に居る母に電話をすると、母は手紙の置き場所を覚えておらず、確かお手伝いさんに預けた中にあるかもしれないというので探してもらったのだ。

封筒の中には制服の引換券も入っていた。

そういえば制服は買ったもののまだ家で見たことはなかった。

それと言うと、「たぶん、取りに行くんだよ」とカンナの母が言い出して、カンナが引換券に印刷されている電話番号に電話をかけて取りに行くことになった。

「指定の通学鞆はあるかい？」と聞かれたので、それはもう家にあると答えた。

結局、通学鞆だけは買ってあることがわかったので、それ以外のものを揃えるのだが、カンナ親子の連携は素晴らしかった。

カンナの母が何度もリストをチェックしてブツブツ言っている隙に、カンナは陽菜に日焼け止めクリームを塗り、睫をビューラーでクルリと上げ、仕上げに昨日と同じ透明っぽいピンクのリップグロスを塗った。

それが終わると、カンナの母が陽菜の髪を梳き、リボンを結んだ。

「ママ、今日の陽菜ちゃんにはそのリボンは似合わないよ。服装と合わないわ」とカンナがきっぱり言うと、残念そうにリボンを解いている。

その代わりにと、小さな苺がついたヘアークリップでサイドの髪を留めていた。

陽菜は家でこんな風にあれこれと構われたことがない。

ママはおしゃべりなのでいろいろ話しかけてはくるけど、陽菜の姉のことが中心で陽菜をあまり熱心に気にかけることはなかった。

姉は成績がよかったので、勉強ができない陽菜のことを馬鹿にする

ことはあっても、洋服を選んだりリップクリームを塗ってくれたこともなかった。

今朝、車の中でパパが「お前は小野寺家のオモチャらしいから、たくさん可愛がってもらえ」と笑いながら言っていたが、オモチャってなかなか良いものだと思う陽菜だった。

渡された手鏡で綺麗になった自分を見ているうちに、カンナの「ママ、陽菜ちゃんのポシェットない？」という一言で、カンナの母が「ダダ」という勢いで二階に行ったかと思うと、また同じ勢いで下りてきた。

「陽菜ちゃん、お小遣い持ってる？」とカンナが聞くので、ポケットに入れていたお金を掴んでテーブルに出した。

「あらあらあら・・・」とカンナもカンナの母も驚いたようだ。

「お財布は？」と聞かれたので、金額じゃなくてお金をそのままポケットに入れていたのが問題らしいと陽菜は気がついた。

「カンナのを取っておいて良かったよ」と言いながら、カンナの母はまた二階に上がって行った。

しばらくして戻ってくると、母のプリントの小さなポーチとハンカチ、ポケットティッシュをテーブルに並べた。

カンナはきれいな紙に、電話番号をふたつ書いた。

「あとでシヨップिंगセンターに行くからね。迷子になることはないと思うけど、見失ったら公衆電話からここに電話してね」と言って、テーブルの上に他のものと同じように置いた。

「さて、何を入れたか忘れるといけないので、自分でバッグに入れてご覧？」とカンナの母が言うので、お金を小さなポーチに入れ、ハンカチ、ティッシュ、そして電話番号の紙を順番にポシェットに仕舞った。

カンナは「喉が渴いたね。何か飲もうか。それから昨日のケーキがまだあるから食べない？」と陽菜に優しく訊ねた。

「買い物はエネルギーが必要だから、甘いものを食べておくほうがいいのよ」と言っつて、陽菜に牛乳のカップを渡し、自分は紅茶を淹れていた。

ケーキを選んで食べていると、何かブツブツと呟いていたカンナの母が電話を掛け始めた。

大きな声なので聞こうとせずとも耳に入る。

どうやらR女子高に去年入学した子供が居る知り合いに電話したらしい。

電話を終わると、上履きはこの店とか体操服はこことか小さな字でメモしたものをカンナに見せていた。

ようやくカンナ母娘の話が終わって、買い物にでかけることになった。

それまで黙っていたカンナの父が立ち上がり、外で待ってるからと言っつて出て行つた。

車で送つてくれるらしい。

カンナの母に見送られて出発すると、カンナはさっそく陽菜の髪を留めていたクリップをはずして、

「ごめんね。もう高校生だというのに子ども扱いしてしまつて・・・

」と済まなそうに謝つた。

「いえ、私とつても嬉しいんですけど・・・」と陽菜は正直な気持ちと言つた。

「そう？それならいんだけど」とカナナは言って黙ってしまった。

狭い街なのですぐに制服屋に到着し、制服を引き取ったあとはショッピングセンターで車を降りて買い物をした。

カナナとの買い物は、陽菜には夢のようなひと時だった。

陽菜の母のようにいつまでも悩むことは無く、どんどん買っていく。学校のものを買った後で、化粧品店に行き透明感のある薄いピンクのリップクリームと、ビューラーを買い、若い女の子向けのシヨックでネイルケア一式を陽菜のために購入した。

遅くなったランチの後、最後に本屋に行って指定の教材を購入すると、とびっきりの笑顔で若い店員に微笑んで荷物をタクシー乗り場まで運んでもらって、二人は無事に帰ってきた。

妖精スマイルって凄い威力だわと陽菜は疲れた頭で思っていた。

夕方、琢磨は昨日より早めに陽菜を迎えに来た。仕事のほうはもう終わっただけらしい。

三人で玄関と車を何度か往復して買ったものを琢磨の車に積み込むと、

陽菜を助手席に座らせて琢磨はドアを閉めた。

「これ」と言ってカナナが封筒を琢磨に渡した。

「一応買っただけだったから。領収書が入ってるから交換や返品のとき使って」

「何から何まですまん」

「陽菜ちゃんと過ごすの楽しかったわよ」

「そうなのか」

「ええ。可愛いし賢いし。あなた方は幸せね。こんなお嬢さんが居るんだから」

「賢いというのは初めて聞いたな」と琢磨は苦笑している。

「勉強だけじゃないわよ、賢さつて。大人の話をよく聞き、決して余計なことは言わない。」

「こんな賢い高校生なかなか居ないわよ」とカンナは陽菜のことを褒めた。

「ほら、陽菜ちゃんも疲れているから行ってちょうだい」

「ああ、ほんとうに世話かけたな」

「明後日はお兄様のところに行くことになってるから、応援よろしくね」

「気が向いたらな!」

「酷いなあ」

軽口を言いながら、陽菜に手を振ると、陽菜は恥ずかしそうに手を振り返した。

さすがにカンナも少し疲れを感じて、自分の部屋で横になった。

少しのつもりがかなり深く眠ってしまったらしい。

気がつけば外は真っ暗になっていた。

一階に下りると、両親がカンナが起きるのを待っていた。

その夜は三人で一緒にお鮎を食べに出かけた。

食事が終わって家に帰ってすぐに、「私、当分バタバタするかもしれない」とカンナは両親に話した。

「東京かい?」と母が聞く。

父が心配気にカンナの顔をみてから、母に「お茶淹れてくれ」と言った。

鮎屋で少しお酒を飲んでいる。きつと話をちゃんと聞くつもりだ。

母はお茶の準備をしながら、「もうすっぱり綺麗に別れて来たんだろ？いまさら・・・」と言い始めた。

「別れるのに綺麗も何も無いだろう」と父が珍しく言い返している。

「で、ややこしいのか？」と父が聞いた。

「弁護士の前もついてるから大丈夫なんだけどね。

本人から直接私に文句を言い出したから、ウザいなあと思って」

今度は「あちらが他所に子供を作ってこうなったんじゃないか」と母が言うので、

「それが微妙なところなのよ」とカンナが言うと、ふたりとも「えっ？」「と驚いてカンナを見た。

「それに事業もあまり上手くないってないようで、そのうち週刊誌に載るかもしれないわ」

両親はしばらく顔を見合わせていたが、「まあ、いいわよ。いざとなったらお父さんと二人、温泉にでも行ってるから。ね、お父さん？」と母が父を促している。

「そうだな。婆さんの容態が落ち着いていたらだけどな」と父も頷いている。

「カンナ」と母が真面目な顔をして口を開いた。

「世間では離婚が簡単になった風潮だけど、経験者を見ると落ち着くまでやはり時間がかかるよ。

カンナは特にかげがえの無い嫁だったからね。あちらさんだって手放してから未練もでてくる。1〜2年は辛抱しなさい。いいわね」

「はい」

「騒がしくなるのが事前にわかったら言ってくれ。それから母さん、取材がきても滅多なこと言うんじゃないぞ」

「わかってるわよ。私はおしゃべりだけど、娘の立場を悪くするよ
うなことはしない」

「ごめんね、いつまでたつても落ち着かなくて」

「まあ、そのうち、時間が立てば誰も何にも言わなくなるぞ」

お茶はとっくに冷めてしまっていたが、3人共何も言わずに飲んだ
夜だった。

最後まで油断はできなかつた工事も無事終わって、琢磨はほっとしていた。

最後の夜に現場を荒らしに来たチンピラ達と小競り合いになったが、ちょうど巡回中のパトカーが通りがかって事なきを得た。

琢磨は喧嘩慣れして置いていてなんともないが、息子はどうなんだろうか。

なんとなく跡を継ぎそうな感じではあるが、琢磨の学生時代と比べると大人しいような気がする。

アイツ、喧嘩したことあるのかなと考えているところに着信があった。

「俺だけど、今いいか？」

兄の満からだ。

「うん。大丈夫だよ。何かあつたのか？」

「明日さ、お前の友人の小野寺さんに会うんだけど・・・」

「いつから友人になつたんだ？」

「お前が同級生というだけで俺に仕事を回したりしないだろうが」

「それが用事か？」

「いや。あれから小野寺カナナの調査をちょっとしたんだけど、なかなか上手くいかなくて」

「ん？」

「小野寺カナナでは情報が無いんだよ。しかも、困ったことにこの周辺の銀行に口座がない」

「ああ、なるほど」

「どうしようか」

「小野寺は最近離婚して実家に帰ってきたんだよ」
「ちえつ、早く言えよ」
「実家に帰ったなら戸籍も戻ってるんじゃないか？」
「そうだな」
「ありそうか？」
「金か？」
「ああ」
「たぶんな」
「そうか。とりあえず明日は会ってみるかな」
「兄貴がなんでこんな時間に時間かかってるんだ？」
「忙しかったんだよ、俺も」

琢磨はカンナが言っていた「応援よろしく！」という言葉を思い出していた。

「俺なら受けるな、この仕事」
「そうか」
「上等な匂いがする」
「え？」
「小野寺カンナだよ」
「ほう。良い女なんだな」

琢磨は言葉を選んで言った。

「アイツは正直だ。自分からは言わないが、直接聞いてみればいいじゃないか。嘘は言わんよ」
「わかった。そうするよ。邪魔したな」
「あ、兄貴。小野寺の旧姓がわかったら教えてくれ」
「了解」

琢磨は無性にタバコが吸いたくなった。
事務員に「コーヒー頼むよ」と言って、タバコに火をつけた。

一方、カンナのほうは設計事務所に行く前に、もう一度資料に目を通していた。

第一回目のプレゼンテーションは大事だと思う。

まだ埃っぽいオフィスの入り口を全開にしてPCと格闘し、いくつかの資料を追加してファイルを作る。

次にインターネットで秋吉設計事務所の情報を検索した。

しかし、田舎の会社である。代表的な仕事はいくつか見つかったものの、社長個人の情報はなにも等しい状態だった。

名前と住所、出身大学くらいか。

すぐに諦めて、どうするかと考えをめぐらす。

プレゼンテーションには相手の分析が大事だというのは過去の経験からも知っている。

ラップトップをスリープにし、蓋を閉じて鞆に入れる。

ネットに情報がなければ近所の井戸端会議に頼るしかあるまい。

「ちょっとお茶でもしてくるわ」とリビングに居た父親に声をかけた。

「山野コーヒーか？」

「うん」

「ついでに豆を買ってきてくれ」

「どの味が良いの？」

「正吾君が知ってるよ」

「おっけ～。車借りるね」と言って家を出た。

正直、山野正吾の店にはあまり行きたくないが、たまにはいいかと

思うことにした。

取り立てて親しくはなれないけれど、まいいかと思ってしまう雰囲気
気が正吾には昔からあった。

木の枠がついたガラスのドアを押して店に入ると、まだ午前中のせ
いか人が居なかった。

正吾が気がついて、「おっ！」と手を上げる。

その仕草も昔のままだ。あまり成長してないらしい。

「あれ？まだ開店前だった？」

「いや、今開けたところ」

「父に頼まれてコーヒー豆を買いに来たの。久しぶりなんで私も飲
んで帰るわ」

「じゃ、ちょっと掛けて待ってて」とカウンターを勧められた。

とりあえず作ったばかりのホットコーヒーをカンナに出しておいて、
「小父さんのブレンドはちょっと難しいんだ」と言いながら、焙煎
器を調節している。

カンナは暫くその様子を見ていたが、一段落したのを見計らって話
しかけた。

「先日はありがとね」

「ん？」

「秋吉君のところ」

「ああ。行ったのか？」

「うん。それでいくつか紹介してもらったんだ」

「そっか。家建てるのか？」

「ん〜、まだわかんないわ」

カンナはコーヒーを一口飲んだ。

「家なんてそんなに簡単に決められないでしょ」

「そりゃそつだ」

「で、今度秋吉設計にも行くことになったんだけどさ」

「へえ、兄貴のところか」

「うん。そういえばお兄さんが居たけど、一級建築士になってるんだってね。」

同じ学校に居たっけ？お兄さんも」

「あれ？知らなかった？俺らの高校の先輩っしょ」

「ふ〜ん。全然知らなかった」

「2年上だよ、確か。秀才でさ、女の子にも人気があったよ」

「思い出せない・・・」

「お前は昔から周りを見てなかったからなあ」と正吾が笑う。

「イケメンかあ・・・。怖いなあ」

「いや、普通、女には優しいだろう。男の俺なんかには怖い感じだったけどな」

正吾は思い出すように目を細めていた。

「うん。切れるって感じだな。鋭いつての？そういう目をしてた」

「でも、もう50歳くらいになったんじゃ人間丸くなってるかもね」

「そりゃそつだろ。子供は確か2人かな。奥さん、結構綺麗な人だよ」

「そつなんだ」

「学生るとき知り合ったとか言つて、確か神戸のいいところのお嬢さん」

「秋吉組も雰囲気変わったね」

「あははは、時代が違うからなあ。親父さんのころとは」

「で、お父さんのほうは引退したんだって？」

「ああ、数年前に琢磨に会社譲つて、財産も適当に子供たちに分けて、楽隠居してるよ」

「へえ。出来た人だね」

「今は20歳以上も離れた女と一緒に暮らしてるんじゃないか？」

「え？秋吉のお母さんは？」

「居るよ」。居るけどさ、親父さんも落ち着かないんだよね。

しばらく居たと思ったら、若い女を作ってしばらく帰ってこないとか。

まだそんなことやってるよ」

「仕方ないなあ。昔の人は」

二人で笑ったが、肝心なことはこれからだった。

「秋吉組ってさ、やっぱりアレなの？」

「ん？」

「私たちは同級生としてしか知らないけど、土木なんて言ったら怖い人たちもつながりがあるのかなって・・・」

「どうだろうか。確かに親父さんの時代は限りなくそれに近かったけどな。」

琢磨は全然違うとおもっ・・・」

「そっか」

「琢磨のお母さんってのがさ、まるつきり姐さんって感じなのよ」

「え〜？そうなんだ」

「うん。昔から若い衆みたいなのが付いてて、まあ親父さんもそうだけど」

「そっか。心してかかるわ」

「ああ、頑張れよ」

「全然心強い励ましにはなっていないだけど？」

「俺が頼りになるわけないだろう」と正吾が笑うので、カンナも思わずつられて笑ってしまった、

運よく店に誰も居なくてよかった。

コーヒーを飲み終える頃には常連さんがやってきて、正吾も俄に忙

しくなる。

カンナは慌てて席を立ち、お金を払って外に出るとほっとした。

正吾の店は分煙になっていなかった。

来る人のほとんどは喫煙者だ。

都会では考えられないなあと思いつながら髪についた煙草の匂いに顔をしかめた。

家に帰り、正吾のところでは開くことのなかったPCを立ち上げ、メールをチェックする。

全部ダウンロードしたところに、階下から母の「ご飯ですよ」という声が聞こえた。

処理するのは午後になる。

ゆっくりすればいいやとカンナは思った。

昼食中は入院している祖母の話題が出た。

今週末には退院するので、母は週末か来週早々にまた祖母の家に行くらしい。

祖母の痴呆がもっと進んだら、自宅で介護するのは難しくなると言っていた。

今の様子では義理の姉たちが可哀想だとカンナの母が言っている。

週明けには一度兄妹会議をするらしい。

「お祖母さんにも希望を聞いてみてね。仲間はずれにすると怒るわよ、お祖母さん」とカンナが言っていると、母は「違くないっ」と言った。

「あ、私、週末は東京に行くかも」とカンナは両親に言った。

父が「そうか」と言ったただけだった。

母に、「東京の帰りにお祖母さんのところにお見舞い行こうかな？」
と言っと、

「それは喜ぶよ」と母は短く答えて、後片付けのために席を立った。

カンナは父親に食後のお茶を淹れながら、「パパ、そろそろ私も車
買おうかな」と話しかける。

「買うのか？」

「うん。田舎だから小回りが利くのがいいなと思って・・・」

「車庫証明は取れるぞ」

「ガレージにおいていいなら、考えてみるね」

「あまり派手なのは目立つ」と父が何気なくアドバイスしてきた。

「東京においてあるのは、ここでは立派に派手だからなあ」と言っ
と、

「国産車にしときなさい」と言っつて、話はそれで終わった。

ミネラルウォーターのボトルを手に、カンナは二階の自分の城に戻
った。

オフィスの仕切りをはずしてしまったので、息苦しい感じは少なく
なった。

もう一度メーラを開くと、昼食中に更に受信数が増えていたので、
片っ端からメールを開けて読んでいった。

明後日、金曜日に2、3のミーティングを東京で設定してそれぞれ
の関係者にメールを送った。

秘書にCCで送るのも忘れない。

午前中はスタッフとの打ち合わせ、午後は取引先、翌土曜日も絡め
て時間の隙間に弁護士と会計士だ。

金曜日の朝一に出るか、それとも木曜日の夜だなど考える。
木曜の夜に着けば金曜日は朝から仕事ができる。

時間を確認して携帯電話に手を伸ばした。

最初は弁護士で次は取引銀行の頭取だ。

銀行のほうは正確には頭取ではなくて秘書なのだが、お願いしておくことがあった。

どちらも卒なく終わらせて、ほっとする。

時間があるので明日の夜に出發できるように簡単に荷造りすることにした。

約束の1時きっかりにカンナは秋吉設計建築事務所に着した。案内を乞うまでもなく、入り口に立ったカンナをスタッフが気がついてミーティングルームに案内してくれた。鉄骨木造三階建ての中庭を配した作りになっており、市街地の狭い土地を上手く使っていた。

少し待つと背の高いダンディな紳士が部屋に入ってきて、「はじめまして、秋吉満です。今日はお越し頂いてありがとうございます」とカンナに挨拶をした。

細身ではあるが日に焼けて健康そうな人だった。

「小野寺さんはうちの琢磨と同級生とは思えない。お若い」と言う。カンナも名前を名乗りニツコリと微笑んで「秋吉君よりはかなり背がお高いですね」と笑って返した。

「あははは、背のことはあいつは気にしてますよ」

「でも、やはりお顔はよく似ておいです」

「それは喜んで良いのか、悲しんでいいのかわかりませんね」と言うので、

「私としては似ていらっしやるのでお話しやすいですけど？」とカンナはそう言っ、満から目を逸らさなかった。

琢磨の兄、満は突然に笑い出した。

笑いが収まると「大変失礼しました」と言って名刺を取り出し、「家をお建てになる計画と伺っております」と態度を改めた。

どうやらテストは合格したらしいことにカンナはほっとした。

土地は手配済みであること、庭も含めて総合的に設計することと建築中の監督も引き受けてくれる建築士を探していることを話し、カ

ンナの考えていることをかいつまんで話した。

「土地はどのあたりですか？」

「これが土地の住所と図面です。写真はここに・・・」とカンナは持ってきた資料を見せた。

満が手にとって見ている間にカンナは、「学校や役所を外観だけですが拝見しました」と話を続けた。

「私には素人なりにも今から建てようとする家に希望があります。好みもあると同時にわからないこともたくさんあります。

それでも自分が納得したものを作っていただきだきと思っています。私に辛抱強く付き合っつて、私の考えを形にしてくださいださる方をお願いしたいと思っています」

「ほお、私が断ればどうされますか？」

「そうですね。別の建築家の人をお願いするだけです」とカンナは淡々と言った。

しばらく満は土地の写真を手を持ったまま黙っていたが、「もう少し具体的にご希望を伺って良いですか？」とカンナを促した。

カンナは自分で作ったファイルを取り出し、それとは別に箇条書きにしたリストを満から見安いようにしてテーブルに置いた。

あまり早口にならないように気をつけながら自分自身で考えた建築概念を話していく。

その説明は1時間続いた。時折満も質問をしたり、補足説明をしてくれる。

ようやくカンナの話が一段落したところで、満は新しいお茶を頼んでくれた。

喉が渴いていた。

「なるほど。小野寺さんのご希望は今までのところは理解できたと思います。」

少し時間をいただけませんか？私なりに形が見えてくるまで時間をいただけるとありがたい」

「ええ、それはもちろんです。今お話したことで足りなければいつでもご連絡ください」

「このファイルは小野寺さんが？」

「はい、自分で作りました」

「よく出来ています。感心しました」

「ありがとうございます」

カンナは連絡先を書いた名刺を満に渡し、「外出がちなものですか、メールをいただければ助かります」と伝えた。

「それで、形というのはどの程度のことでしょうか？」とカンナは素直に聞いた。

「建築のコンセプトです。設計図はまだ描きませんが、見取り図と外観イメージはラフでよければ何パターンか作れるとおもいます」と満が言ったので、

「工期スケジュールも簡単につくっていただけたら嬉しいです。同時間にお金の手配も考えなければならぬので、支払いスケジュールも示していただければ助かります」

満はそれを聞くと、決心したようにカンナに言った。

「小野寺さん、失礼ですがどの程度の広さの家をお考えですか？」

「秋吉さんには建築家として、どの程度守秘義務がお有りと思っ

おいですか？

もし、私の考えを他に漏らさないとお約束いただけたら具体的なフロアプランについて希望を述べたいのですが」

「もちろん、施主さんのお考えは100%この建物から出ないことをお約束します」

「それは良かった。もうご存知のとおり、専門用語は知りませんので、私なりにお話していいですか？」

「ええ、小野寺さんのご説明は非常にわかりやすい。ビジュアル的ですし」と満が言ってくれたので、カンナは一呼吸してから詳しく説明を始めた。

「これは絶対に希望するもののリストです」カンナは別の新しいリストを見せた。

満もかなり突っ込んだ質問をする。

その後一時間のやりとりで、なんとかカンナは自分のプランを全部説明したつもりだ。

「建築面積がどのくらいになるのかは私には今のところ見えません。秋吉さんに考えていただいてから決めてよろしいでしょうか？」

「それが私の仕事なのでお任せいただければいいのですが、もうひとつ大事なことを伺いたい」

「はい何でしょうか？」

「資金はどういう手段でお考えですか？」

「支払いスケジュールが決まったら、それに合わせてキャッシュでと考えています」

「個人としてはかなり大きな建築になるのはわかっていますしやいますか？」

「はい」

「材料費についてもかなりの金額になります。基礎、造園、建物は別の業者になります。それぞれ契約に基づいてスケジュールどおり

が望ましいですね」

「信用調査をしていただいて構いません」

「ありがとうございます。でも、小野寺さんはこの街の銀行と取引がありますか？」

「そう、そこなんです。近くの銀行や信用金庫などには口座がないのですよ。」

私は都市銀行にしか口座を持っていないので、そこからお支払いしますけど、

ご心配でしょうからここにお問い合わせ下さい」

と、カナナは取引銀行の頭取と顧問弁護士の名刺をコピーしたものを差し出した。

「その銀行だけでは信用が足りない場合は、弁護士に何でも問い合わせさせて下さい。」

必要なものは準備するように言っておりますから」

カナナがそう言うと、「お気遣いありがとうございます。いずれ時期がきましたら問い合わせさせていただきます」と満は返答した。

たくさん話したので喉が渴いたカナナは、満にお茶のお替りを頼んだ。

「私も喉が渴きました」と満は笑って言って、内線でお茶を頼んでから「ところで小野寺さんは、料理はなさるのですか？」

「はい？料理ですか？」

「はい。ご自分で料理を作られる方なのかどうか判断できませんでしたので」

「そうですね、ここ何年かはあまりそういう機会がなかったのですが、お料理自体は好きなので、この家が出来たらするつもりです」

「そうですね。普通女性はキッチンの話から入るのですが、小野寺さんはそうではなかったものですか」と満は笑った。

「ああ、今日は全体のコンセプトについてお話だけだと思いましたが、

キッチンのカウンターの素材とか、包丁置き場についてとか、キャビネットの取っ手についてはとか・・・、そういうのはまだ先の話だろうと・・・」

「やはり、そうでしたか」

「そういうのはインテリアだと思っております。建築とはまた別に考えております」とカンナが言うと、

「その通りです。わかってらっしゃる」

「それと写真がたくさんありますが、海外のはご自分で？」

「はい。行った時に撮ったものです」

「海外に暮らしたことはあるのですか？」

「少しだけですけれどね。フランスとカナダにはしばらく居ました。

あとは旅行のみです」

「そうでしたか。色彩感覚が素晴らしいです」

カンナは思わず噴出しそうになりながら、「褒めて頂いても何もでませんよ」と言った。

「お世辞じゃないですよ」と満は言ったが、「もう今日は説明に脳を全部使い果たしてしまったので少々疲れました」と二人で笑っているところに、スタッフがお茶を持ってきた。

お茶で喉を潤しながら、海外で印象に残った建物の話をする。

満も2年ほどヨーロッパを中心にいろんな国を放浪していたことがあると、昔を懐かしんで楽しそうに話した。

最後にラフイメージができるだいたいの期日を確認して、設計事務所を後にしたカンナは家に帰ってようやく深く深いため息を吐いた。

満がなかなか好人物だったことに安堵した。
時々、カンナが女であることを見下す輩も居る。
ちゃんと礼を尽くして接してくれたのは有難かった。

空港までの高速バスの時間にはまだ間があるので、少し横になろうとしたが、

先に琢磨に連絡を入れたほうが良いと気がついて携帯に手を伸ばした。

『今日は秋吉設計さんに行って来ました。優しくお話を聞いてくれて、とりあえず考えてくれるとのこと。秋吉君のおかげです。ありがとうございます』

そういうメールを送った。

携帯を横に置いて目を瞑ろうとしたときだった。

着信があった。バイブレーション設定もしているので、ぷるぷる震えている。

カンナは嫌々携帯を開いた。

秋吉琢磨からの電話だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7496w/>

カンナ

2011年10月20日08時22分発行